



聖徒の道 1973 12

聖徒の道

1973

12月号

もくじ

聖典の中から答えを見つけなさい…… 527 ……ハロルド・B・リー
 山上の垂訓…… 530 ……デビッド・ヤーン・ジュニア
 教義と聖約の中に見られる
 予言と約束…… 535 ……ロドニー・ターナー
 予言者ジョセフー自ら綴るその性格…… 539 ……J・ルイス・テイラー
 末日聖徒の讚美歌著作の指針…… 543 ……アレグザンダー・シュライナー
 クリスマスのものがたり…… 547
 世界中の子どもたちにおくる
 クリスマスのことば…… 548 ……大管長会
 ジョセフ兄弟…… 550
 質疑応答…… 555
 タヒチ島の什分の一…… 557 ……マシュー・カウリー
 教会指導者に従いなさい…… 558 ……ハロルド・B・リー
 神権者の責任…… 563 ……N・エルドン・タナー
 神権の召しを全力を尽くして
 遂行すること…… 568 ……マリオン・G・ロムニー
 ローカル・ニュース…… 572

今月の表紙

あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。

そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。(マタイ5:14, 16)

裏表紙

しかし、わたしはあなたがたに言う。目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈入れを待っている。刈る者は報酬を受けて、永遠の命に至る実を集めている。まく者も刈る者も、共に喜ぶためである。(ヨハネ4:35, 36)

聖徒の道 12月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布5-8-10
 配送 東京ディストリビューション・センター
 東京都港区南麻布5-10-25
 定価 年間予約 1,300円 1部 130円
 海外予約 1,800円

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

ハロルド・B・リー
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

スペンサー・W・キンボール
 エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 デルバート・L・ステイプラー
 リグランド・リチャーズ
 ヒュー・B・ブラウン
 ハワード・W・ハンター
 ゴードン・B・ヒンクレー
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・パッカー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
 (内務伝達部長)
 ジョン・E・カー (配送・翻訳部長)
 ドイル・L・グリーン
 (教会誌編集主幹)
 ダニエル・H・ラドロウ
 (教育資料担当主幹)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木沼修一

ローカル編集

高木まりゑ



聖典の 中から 答えを 見つけ なさい

使徒パウロは愛するテモテに賢明な助言を与えた。「自分のことと教のこととに気をつけ、それらを常に努めなさい。そうすれば、あなたは、自分自身とあなたの教を聞く者たちとを、救うことになる。」(Iテモテ4:16)しかしパウロはそれからこう言った。「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、不信者以上にわるい。」(Iテモテ5:8)

少しばかり残念に思ったことであるが、私は最近教会員の家庭に育ったひとりの姉妹がこのように尋ねるのを聞いた。「アダム以前の人類についてどうお考えですか。」それは十分に信仰の基礎を教わったと思われる人であった。

私は彼女に尋ねた。「アダム以前の人類ですって？」

彼女は答えた。「ええ、アダムの時代よりも前に人類が存在した証拠があるのではないですか。」

私は言った。「聖典の言葉を忘れましたか。『われ主なる神、土の塵を以て人を造り、生命の息をその鼻孔に吹き入れた。人すなわち生ける〔霊の結合体〕となりぬ。すなわち……最初の人間なり。』(モーセ3:7)と書いてあります。あなたはそれを信じますか。」

彼女は科学者の学説を読み、創造に疑いを持ったのである。彼女の質問の真意は、「あなたは科学と宗教をどのようにして一致させますか」ということであった。答えは、もし科学が真理でなかったならば、誤りと真理とを両立させることはできない。

伝道に出る宣教師は、神殿の儀式で述べられていることから考えた場合、聖典の教えと科学の教えをどう調和させるかについて時々質問を寄せる。その返事に折々私は、予言者ジョセフ・スミスがカートランドで受けた啓示のことを話すのである。主の降臨される福

ハロルド・B・リー大管長

千年統治の初めに起きる大きな出来事についての啓示である。主は言われた。

「実に、われ誠に汝らに告ぐ、主の来りたもうその日にはすべての事を顕したまわん。すなわちすでに過ぎ去りしこと、また何人も知らざる隠れたること、この世の造られたる事物のこと、またこの世の目的、終りなど、すなわち最も貴きこと、天上のこと下界のこと、地の中のこと地の上のこと、また天にあることなどを顕したまわん。」(教義と聖約 101:32-34)

そして私は言う。「もしあなたや私が、主がこのことを啓示して下さる場にあわせたら、私はあなたの質問に答えましょう。この世がどのようにして造られたか、人間がどのようにして地に置かれたかについて。そのときまでは、ただ聖典に記されていることを支持し信頼するだけです。私たちはあとのことを信仰によって受け入れるのです。」

ジョセフ・スミス大管長は言った。「私たちの青年たちは研究熱心である。彼らは感心なくらい熱心に真理と知識を求めている。しかし彼らはそうするに当って、人の数多くの理論を一時的に取り入れなければならない。人の理論を、探求に役立つ足掛りとなすなら人の理論に何ら特別な害はない。これらの理論を基本的な真理とする時に、問題が生じ、探求者は、正しい道からそれて行き恐ろしい危険に直面するのである。」(「福音の教義」第I巻P.54)

私は数年前、偉大な科学者のひとりヘンリー・アイリング博士のクラスに出席する特権を得たが、そこで質問が出た。「アイリング博士、主はなぜこのようなことが起こった経過を説明されないのでしょうか。」博士は少し説明されたが、記憶によればこのようなことであった。「それは8歳の子供に原子エネルギー理論を説明しようとするようなものだろうと思います。8歳の子供には理解できません。理解できるようになるまで、私たちは主が示して下さったことだけに頼らなければならないのです。」

アイリング博士はこう書いている。「私はよくこういう質問を受けた。『アイリング博士、あなたは科学者として神の啓示する宗教をどのようにして受け入れるのですか。』答えは簡単である。福音は我々を真理だけに導く。科学に応用される実験はそっくり宗教に応用される。『福音は我々を真理だけに導く』という原則を試してみたまえ。あなたの考えている宗教はこの原則を満たすだろうか。私にとって、宇宙を治め、宇宙の運行に関与する神という概念は、人に関心を抱く存在であるとの推論なしでは、まったく成り立たない。これは世にある現象の中で最も注目に値するものである。人間に関心を寄せる神が、人の進歩と福祉の計画を用意することは自然である。この計画こそがイエス・キリストの福音である。

……福音は事実、宇宙の創造主がその子らを導いてみもとに帰らせるために立てられた計画である。幾代にもわたり、神はふさわしい息子たちの中から子らの指導者として働く予言者を選んだ。現在末日聖徒イエス・キリスト教会は、聞く知恵を持った人に教えと勧告を与える賢く善良な人々により管理されている。」(「科学者の信仰」〔英文〕P.103, 104)

何年前か前、スウェーデン伝道部長が、汽船で散在する小島を縫いながらフィンランドへ向かったときの経験を話してくれた。彼は波を切って進む汽船をながめていて、多くの島の間で船乗りの取る航路が決まっていることに気がついた。彼はなぜだろうと考えた。なぜあちらの面白そうな島を避けてこちらのつまらない島の方によるのだろうか。

彼は言った。「座って不思議に思いながら観察しているうちに、ほうきの柄のようなものが海の前方に見え隠れしているのに気づきました。そのとき私は、だれかが一番安全な

主は

標準聖典の中に、

真偽をはかる手段を

与えられた。

航路を海図にして、船乗りを導く浮きを置いたのだと知りました。」

そして彼はこのような教訓を得た。「それと同じように、神様の技師たちは私たちに一番安全な道を書き残しました。それはイエス・キリストの福音に書かれています。私の乗った船が危険な海を通過して安全な場所に導かれていったように、間違いなく。」

もし私たちが曲がった道に踏み込まないように、また危険を買って出て心に疑いや疑惑の種をまいたりしないように、人々にこの原則を教え、自らこの勧告に従うならば、またもし主の啓示されたことに満足をして、自分の家族に、信仰により主の啓示された事柄を受け入れることを教えるならば、この動揺の時代において私たちはまっすぐな道に沿って歩めるであろう。

数年前、ある有名な哲学研究団体の幹事が現代の靈感の欠如を嘆いて、現代を「靈感のない政治の時代」と表現した。周囲のどこを見ても彼の主張を裏づける証拠が多く見られる。彼によれば、いわゆる芸術の領域で、絵画の異様な風潮やグロテスクな彫刻、音楽の不協和音や詩の奇抜さが、靈感に欠けた時代を証明しているという。ある人はまた、現在の宗教に「様々な教の風に吹きまわされたり」、靈性に代わる儀式主義で満足したりする素地があるのも、その兆候であると言うかもしれない。

記憶によれば、その幹事は問題は明らかにここにあると述べた。すなわち現在必要とされている靈感の源、聖書を世の多くの人々がもはや信頼できないと考え、その結果、キリストは多数の人にとって、実際に聖書の言葉を語ったかどうかははっきりしない、ばく然としたあいまいな人物となってしまったことである。

私たちは、人の慣習を捨て、近代の発見や予言の成就によって確立された真理、聖書に対する信仰を回復するときのみ、統治者にとっても国民にとっても同じように必要な靈感を再び受けるであろう。

主は言われた。「されど、汝らに命ず、すべて何事も惜むことなく与えたもう神に願うべし。また『みたま』の汝らに証したもうところを汝らの為すはわれ正しく望むところなり。すなわち、汝ら全く聖きところを以てこれを為し、わが前に正しく歩み、汝らの救いの末に就きて考え、祈りと感謝とを以て何事をも為し、かくして悪霊または悪魔の教えまたは人の造りたる戒めに陥らざる様に行きなすべし。そはある教えは人より出で、また他の教えは悪霊より出ずればなり。」(教義と聖約46:7)

私たちは人々に、聖典に答えを捜せと教えなくてはならない。私たちは皆、聖典に答えのない質問には答えることができない、と言う賢明さを持ちあわせていたいものである。また聖典の教えと反対の教えを聞いたときに、だれもがそれを誤りだと知るようでありたいものである。それは同様に簡単なことである。しかし残念なことに、私たちの内の多くは聖典を読んでいない。聖典に何が書いてあるかを知らないのに、聖典自体の中に見つかるはずの事柄をあれこれ推測するのである。私はそこに、私たちにとって現在最大の危険のひとつが存在すると考える。

私は宣教師たちに会って神殿のことについて聞かれるとき、話の最後にこのように言う。「標準聖典と大管長の正式な声明の中に答えが見つからないならば、私はあなたがたの質問にあえて答えようとはしません。」

主は標準聖典の中に、真偽をはかる手段を与えられた。次の主の言葉に心に向けることを願うものである。「汝の受けたるところのもの、すなわちわが聖典の中にて律法として汝らに与えられたる事は、すべからく取りて以てわが教会を支配する律法となすべし。」(教義と聖約42:59)



山上の垂訓

デビッド・ヤーン・ジュニア
ブリガム・ヤング大学哲学教授

絵：ポール・ギュタブ・ドレ (1833-83)
による銅版画

大部分のキリスト教徒が、これまで山上の垂訓を尊重してきたが、最近、聖書の他の部分と同様、山上の垂訓も批判の対象となっている。山上の垂訓は実際には語られなかったという者さえいる。主題が次々と変るので、倫理的な教えをただ集めたものにすぎず、従って、実際に説教したと考えるにはあまりにも統一性に欠ける、というのである。

しかし、モルモン経は、マタイによる福音書5、6、7章に記録された説教が、実際に話されたものであることを証明している。なぜなら復活した主は、アメリカ大陸において、新約聖書で山上の垂訓と呼ばれているすばらしい説教とほぼ同じ内容の説教をされたからである。

さらに、回復された福音に照らしてみれば、この説教が非常に系統だった

ものであって、決して倫理的な教えの断片を集めたものではないことがわかる。

山上の垂訓は次のように要約することができるだろう。

マタイ5：1-12。主は従う者に話しかけておられる。八福の教え。弟子たちに何が期待されているかを一般的に示される。そしてそれに沿うならば数々の祝福が与えられることを確約される。

マタイ5：13-16。主は弟子たちのことを、地の塩、世の光と呼ばれる。弟子になることは大きな責任であることを示される。

マタイ5：17-20。主はモーセの律法を廃するために来たのではなく、成就するために来たことを告げられる。これは垂訓全体の中心となるところである。

マタイ5：21-6：34。主の福音がモーセの律法よりも多くのものを求めることをわかりやすく説明される。

マタイ7：1-23。勧告と警告を内容とした一般的な6つの基本原則を話される。

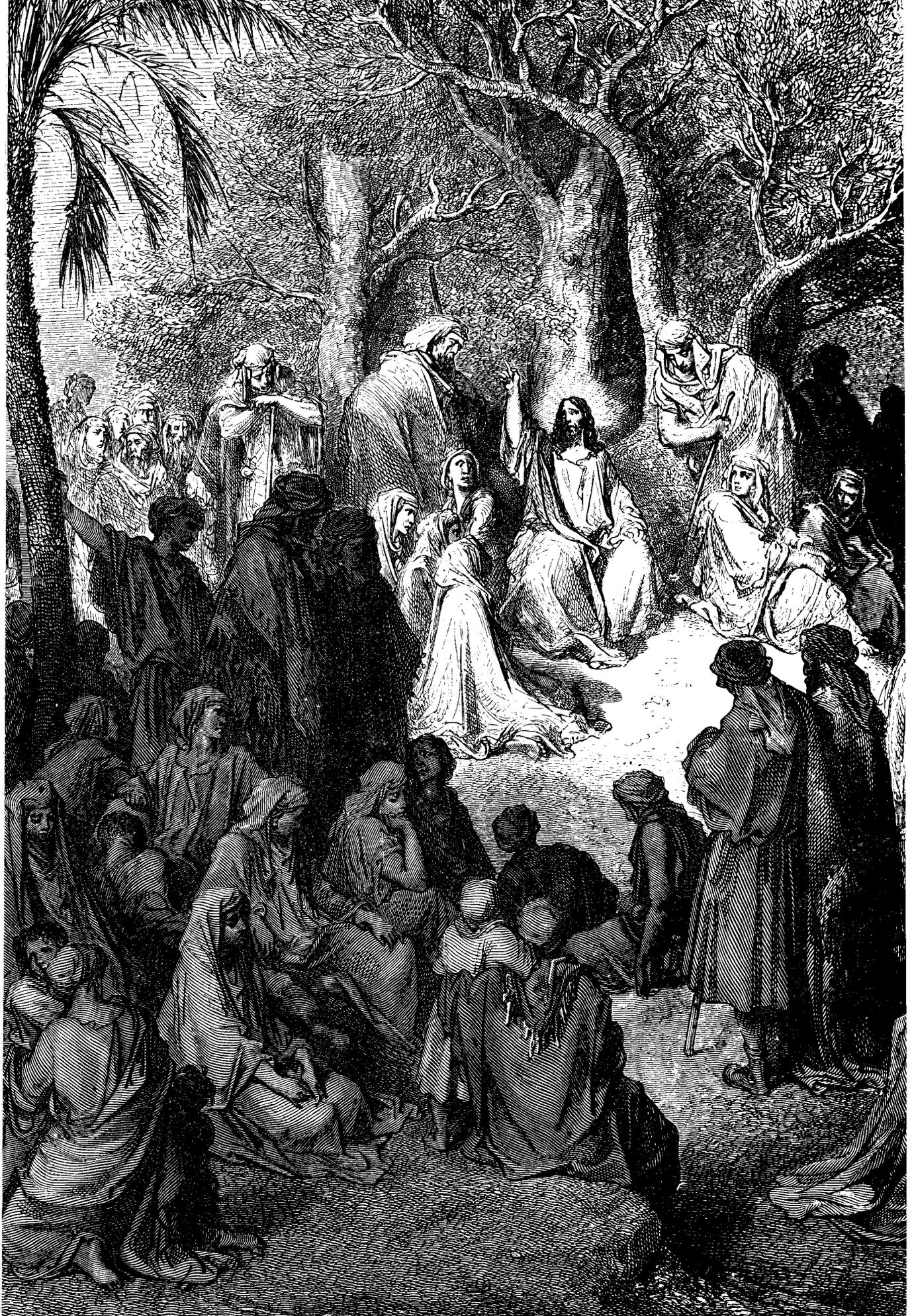
マタイ7：24-39。主は力強いたとえ話を使って、メッセージを受け入れて求められたことを実行するように聞く者を説得される。

モーセの律法について非常に重要な宣言をされたマタイ5：17から見ていこう。主は言われた、「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思っ

てはならない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。」これは山上の垂訓全体の中心となる聖句である。アビナダイは、モーセの律法が制定されたのは、かたくななイスラエルの子らに、日々神を思い起こさせるためであるとモルモン経の中で教えている。モーセの律法の目的は、人々の心をキリストに向けさせることであった(ヤコブ4：4、5)。アビナダイはまた、救世主の贖いがなかったら、「たとえモーセの律法があっても世の人は亡びるほかはないのである」(モサヤ13：28)と教えている。

それから何十年もたって、復活したキリストはこの偉大な説教を再びニューファイ人に話されたが、そのときキリストは、一部の人が、モーセの律法について言ったことに疑念を抱いていることに気づかれた。そこでキリストは言われた。

「モーセに授けられし律法は、もは



やその目的を達して効用のなきものとなりぬ。

律法を授けたる者、またわが民なるイスラエル人と誓約を結びたる者はすなわちわれなり。それ故に、モーセの律法はわれによりてその目的を達して効用のなきものとなりたり。われは律法の目的を達するために来りたるによりて律法は終るなり。」(Ⅲニーフアイ 15: 4, 5)

主は、モーセの律法を与えたのは自分であり、この律法は主にあって成就し、終りを告げたことを、御自身ではっきり宣言された。いったん、このことを理解すると、山上の垂訓に一貫したテーマが流れていることがわかり始める。

主が律法を成就し、人類の罪を贖うために自分が最後の無限の犠牲になるという宣言が、残りの説教の基調となっている。そして、主の福音はモーセの律法よりはるかに大きなもの、すなわち模範となる行為を要求することを数多くの実例によって示された。

主が話しかけておられた人々が、従う人々であり、決してただ群がっているやじ馬でもなければ、不信の徒、何もしない好奇心だけの人々でもないことを思えば、山上の垂訓が一貫したものであることがうなずけるであろう。マタイは冒頭で、主はこの群衆を見て山に登られた、すると弟子たちがみもとに近寄ってきたので、彼らに教えて言われた、と記している。ジョセフ・スミスによる靈感訳聖書は、この点を極めて明らかにしている。主は言われ

た。

「わたしを信じる人たちは、さいわいである。さらにあなたがたがわたしを見たことと、わたしがいることを証する時に、あなたがたの言葉を信じる人たちは、なおさいわいである。

あなたがたの言葉を信じ、深くへり下ってわたしの名によってバプテスマを受ける人たちは、さいわいである。彼らは火と聖霊の訪れを受け、罪のゆるしを受けるであろう。」(靈感訳マタイ 5: 3, 4) ここで主は人々に、わたしを信じなさいと呼びかけておられるが、ただ単に一連の倫理的な提案に従うように促しておられるのではない。

マタイの記録によれば主はこう言われた、「あなたがたは、地の塩である」(マタイ 5: 13)、また「あなたがたは、世の光である」(マタイ 5: 14)。このような榮譽に満ちた呼称は、弟子にだけ適用されるものである。マタイ 5: 11で主は再び言われた。

「わたしのために人々があなたがたをのしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。」

主と共にいることを世の人に知られた弟子たちは、世の迫害を避けることができない。ここで主は弟子以外の人々に話しかけていたと考えられるだろうか。

イエスが信じる者に話しかけておられたことと、モーセの律法に取って代った福音の律法に沿って生活するよう教えておられたことを理解すれば、山

上の垂訓に一貫した流れがあることがわかるだろう。これは決して的はずれの、平凡な道徳訓を集めたものではない(主の名によってバプテスマを受け聖霊の約束を受けることは、疑いもなく倫理上の教え以上のものである)。

山上の垂訓は、イエスがキリストであるという証と、主の教えの倫理的な面を受け入れるだけでなく、進んで主を人類の贖い主として受け入れる証を前提とした基本的かつ実際の、また真実の神学上の律法である。

説教の基盤を固めた上で、主は続いて数々の具体的な例を引きながら、ただ外見上従うだけでは弟子になれないことを強調された。内面的に変わっていかなければならないのである。

ただふるまいだけが正しくなっても目標からはほど遠い。ふるまいがよくなることは大切であるが、それはイエス・キリストの福音の目的ではない。福音の目的は、生まれながらの人を生まれかわらせることにある。正しいふるまいは、人を「死からいのちへ」(Iヨハネ 3: 14) 引き上げる霊の再生の結果にすぎない (Iヨハネ 3: 14)。

主がこの概念を山上の垂訓でどのように説明しておられるか、例を幾つか見てみよう。

「昔の人々に『殺すな。……』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。……」(マタイ 5: 21; Ⅲニーフアイ 12: 21参照)

「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」(マタイ 5 : 27, 28 ; Ⅲ ニーフアイ 12 : 27, 28 参照)

「また昔の人々に『いつわり誓うな、誓ったことは、すべて主に対して果せ』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。いっさい誓ってはならない。……あなたがたの言葉は、ただ、しかり、しかり、否、否、であるべきだ。……」(マタイ 5 : 33-37 ; Ⅲ ニーフアイ 12 : 33-37 参照)

「『目には目を、歯には歯を』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。」(マタイ 5 : 38, 39 ; Ⅲ ニーフアイ 12 : 38, 39 参照)

「『隣り人を愛し、敵を憎め』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、迫害する者のために祈れ。……」(マタイ 5 : 43, 44 ; Ⅲ ニーフアイ 12 : 43, 44 参照)

以上の聖句からわかるように、福音は単に良い行ないや清い手を求めるだけでなく、清い動機と、純粋な心を求めている。少し調子は変わるが、続

けて福音の要求するところをわかりやすく説きながら、次のようにも言われた。施しをするときには、人に見られないように、ひそかにしなさい(マタイ 6 : 1-4 ; Ⅲ ニーフアイ 13 : 1-4 参照)。

祈るときには、偽善者たちがするように皆に見える所で、注視を浴びようとしてするのではなく、ひそかに祈りなさい(マタイ 6 : 5-15 ; Ⅲ ニーフ



アイ 13 : 5-15)。

断食していることを見せびらかしてはならない。ひそかに父なる神に断食しなさい(マタイ 9 : 16-18 ; Ⅲ ニーフアイ 13 : 16-18)。

これに続いて主が命じられたのは、一見全く異質と思われることについてである。しかし、よく考えてみれば、これは非常に広く一般にも適用できる教えである。

「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびが付き、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。

むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。

あなたの宝のある所には、心もあるからである。」(マタイ 6 : 19-23 ; Ⅲ ニーフアイ 13 : 19-23)

ここで主は、一時的なものと永遠のもの、一時的にしか価値のないものと永遠に価値のあるものを対比された。

この概念は繰り返し登場する。これはキリストの教え全体に流れている中心的なテーマである。

現代の批評家たちは、山上の垂訓の中でもマタイ 6 : 24-34 に特に注目している。批評的的は次の25節に集中している。

「それだから、あなたがたに言うておく。何を食うのか、何を飲もうかと、自分の命のことで思わずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思わずらうな。……」

批評家たちは、この勧めが全く実際的でないと言う。もし人がこの勧めに従うなら、社会に混乱が生じるだけだと指摘する。しかし、靈感訳あるいはもっとはっきり記されているモルモン経の山上の垂訓を見ると、次の啓示を読み取ることができる。

「イエスは右のことを述べたもうてから、すでに選びたもうた十二人に向けて次のように仰せになった『われが宣べたる言葉を忘るな。われがこの民を教え導くために選びたる者はすなわち汝らなり。われ汝らに告ぐ、汝らはその命をつなぐために何を食い何を飲まんとて思いわずらうことなかれ。その身体に何を着んとて思いわずらうことなかれ。……』（Ⅲニーフアイ13：25）

この説教は全体を通じてイエスの弟子たちに、（あるいは弟子になろうとする人たちに）語られたものであるがここに見られる勧告は、キリストの特別な12人の証し人に向けられたものである。ほかの人に対しても「思いわずらうな」と言われたのではなかった。

山上の垂訓の第3部であり最後の部分で占めるマタイ伝7章には、5つの大切な勧めと警告が記されている。

1. 「人をさばくな。自分がさばかれないためである。あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。」（マタイ7：17；Ⅲニーフアイ14：1，2参照）

2. 「聖なるものを犬にやるな。ま

た真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。」（マタイ7：6；Ⅲニーフアイ14：6参照）

3. 「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。……このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をするを知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあるか。だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。……」（マタイ7：7，11，12；Ⅲニーフアイ14：7，11，12参照）

4. 「狭い門からはいれ…」（マタイ7：13；Ⅲニーフアイ14：13参照）マタイ伝7章にあるこの警告の1節は非常に短い、重要さにかけては他に匹敵するものはない。13節の中の鍵となる文章は、上に引用した文で、大切なのは、「狭い」という言葉である。主が生命に至る門と表現しておられる門は、厳しい門である。主は明らかにこれらの聖句で、福音が決して気まぐれな性質のものではなく、厳密できびしい要求を持っていることを明確にしようとしておられる。

5. 「にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、その内側は強欲なおおかみである。」（マタイ7：15；Ⅲニーフ

アイ14：15参照）主は弟子たちにこの警告を与えた後、にせ預言者と本当の預言者を見分ける規準を示された、「このように、あなたがたはその実によって彼らを見わけるのである。」（マタイ7：20；Ⅲニーフアイ14：20参照）

6. 以上の説教が終わった段階で、主はふたつの強力な宣言をもって弟子たちを警告し、垂訓を閉じられた。最初の宣言は、この垂訓のテーマに戻るものである。すなわちイエスがキリストであるという証に基づいたテーマである。この宣言は次のとおりである。

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。

その日には、多くの者が、わたしにむかって『主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか』と言うであろう。

そのとき、わたしは彼らにはっきり、こう言おう、『あなたがたを全く知らない。不法を働く者どもよ、行ってしまえ』。」（マタイ7：21—23；Ⅲニーフアイ14：21—23）

人類を贖うために代価を払ったイエス・キリスト、また信仰、悔改め、権能あるしもべからバプテスマを受けることを条件として、人類をゆるされた慈悲深いイエス・キリストが、上記のように裁きの座につくのはいかにもふ

教義と聖約の 中に見られる

予言と約束

ロドニー・ターナー

ブリガム・ヤング大学
教会歴史及び教義学教授

「教義と聖約」には独特の輝きが見られる。真理の内に美があるからである。人が聖霊によって靈感を受けるときには、彼が明らかにする真理は、どのように平易に述べられたものであっても、言葉と道理を越えた強い力を持つのである。(教義と聖約50：21, 22, 68：3, 4参照)

この力は神よりのすべての啓示の中に充ち満ちる生氣であり、ウィリアム・ムレリンが予言者ジョセフ・スミスを受けた「最も小さき」啓示と比肩する啓示を編み出そうとしてできなかったその力である。(教義と聖約67：5-7参照)

聖霊の力は予言者たちに靈感を与え時として詩歌をうたい読ませ、詩のもつ心と豊かさを最もよく備えたその言葉の内に福音の真理を語らせる。「教義と聖約」の中にあって、あたかも散りばめられた宝石のごとき輝きを放つ次の言葉に目を留めよう。

地の威光

地はその道をかけり、

さわしいことである。

主はこの荘重な説教を閉じるに当たって、最後に賢い人と愚かな者の印象深いたとえで警告の言葉を残された。

「わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。……また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」(マタイ7：24-27参照)

山上の垂訓がキリストの贖いの使命を確固たる基盤にしていることは、明らかである。またこの説教の中には、イエスの名のために悪口雑言はもとより、迫害をも甘んじて受けようとする弟子が満たさなければならない、基本的な条件が記されている。主は御自分が救世主であることについて誤解が生じないように、わたしの心を行なって永遠の生命を得なさい、と人類に呼びかけつつ、自分が全人類を裁く者であることを明確にされた。

イエスが以上のことを話し終えられたとき、「群衆はその教えにひどく驚いた。」これは無理からぬことであった。「それは律法学者たちのようではなく、権威ある者のように、教えられたからである。……」(マタイ7：28, 29)

日輪は昼間その光を与え、
月輪は夜その光を与え、
諸星もまた夜にその光を与え、
みな神の能力の中に
その光栄を顕してかけり行く。

——教義と聖約88：45

主の来臨

またかく言われん。
染めたる衣をまといて、
天なる神の御許より降り来るこの者は
誰か。誠にかの光栄ある衣を着け
大いなる力をもて
われらの知らざる所より来る者は誰な
るか。

——教義と聖約133：46

栄光をまとう地

地は生みの苦しみをなし、
その力を出せり。
真理はその中に建てられる。
天は地にはほほ笑み、
地はその神の栄光をまとう。
神はその民の唯中に立ちたまえばなり。

——教義と聖約84：101

「教義と聖約」は、予言者としての
ジョセフ・スミスの召しを証する。また
ジョセフが火と聖霊のバプテスマを
受けたことも証している。彼がまことに
「天使の言葉」で語ったからである。
(Ⅱニューフェイス3：13, 32：2参照)

「教義と聖約」は、現代の啓示を集
めた唯一の標準聖典である。一見した
だけではこの聖典は、多くの様々な主
題に及んだ、相互に関連のない挿話的
な啓示を集めた書であるかのように思

えるが、これがひとたび宗教史の一本
の糸でつながれるとたちまち真珠の輝
きを放つのである。その糸とは、大い
なる背教の荒野から「唯一の真にして
生命」ある教会が現われ出してから（教
義と聖約1：30参照）、神が悪の力に
最後の勝利をおさめ、地球と神の息子
娘が日の栄光化される時（教義と聖約
76：106—108, 88：14—29, 130：6
—9参照）までの回復の歴史である。

このように、「教義と聖約」は、「規
則に規則を加え、則に則を加え、ここ
にもすこしくかしくにも少しく教え、
まさに来らんとすることをわれらに声
明して慰めを与え希望を固く」するた
めに予言者ジョセフ・スミスのもとに
現われた神の御使いたちの働きを誌し
ている。（教義と聖約128：21参照）

主は「教義と聖約」の中で、将来の
ことを明らかにして私たちの希望に確
信を与えたばかりでなく、現在直接関
わりのある事柄、すなわち今私たちの
行ないの内にいる事柄についても強調
しておられる。

現在の世の状態の終りと福千年のイ
エス・キリストの王国の到来を目にす
るこの世代に向けられたものであるた
め、「教義と聖約」には闇と光について
誌される必要があった。なぜなら、こ
れは包み隠しのない書だからである。
現在あるがままの事柄が誌され、誰か
が偽って述べ立てようとしたようなも
のではない。

キリストがこの世に来られる前のこ
の最後の時代に関する「教義と聖約」
の予言（教義と聖約45：42, 64：24）

を単なる誇張と考える人々がいるかも
しれないが、それは人を納得させるよ
うな論議とはならない。「教義と聖約」
には全く否定を許さない正確さがあ
る。次のような勧告が与えられてい
る。「これらの誠命をしらべよ。そは
これらは真実確なる誠命にして、その
中に言われたる予言も約束もすべて成
就さるべければなり。

主、われ言いたることは、われ言い
たるなり。われ言ひ逃れせず。天地は
過ぎ行くとも、わが言は過ぎ行くこと
なくして成就すべし。わが声にて言わ
るるも、僕らの声にて言われるもみな
一つなり。」（教義と聖約1：37, 38）

主がその御言葉通りに行なわれるこ
とは火を見るよりも明らかである。な
ぜなら、主は「真にへり下る者悔いる
精神ある者に智慧を授け、神を敬わざ
る者を罪あり」とするために「みたま」
を送られたからである。（教義と聖約
136：33参照）

また福千年には、イエスが祈られ、
大昔から心の清い人々が求めてきた
「義しき者の日」が始まるが、「教義
と聖約」には、福千年前の神の裁きを
伴う恐ろしい霊的な暗黒が予言されて
いる。（教義と聖約45：12—14参照）

これまで人類を義人と悪人とに分け
ていた淵は、ますます広がりつつある。
これは1831年の予言の成就である。

「地より平和の取り去られ、悪魔自ら
の領土を支配する時はなおいまだしと
いへども今や近きにあり。されど主も
またその聖徒らを支配し……」（教義
と聖約1：35, 36）

* * * * *

* * * * *

* * * * *



人間は「鏡に映しておぼろげに」この世を見ているが、主は真理を貫く目で理解しておられる。世界は次第に良くなりつつあると論ずる人々がいるにもかかわらず、現代の啓示は、世の罪悪は熟しつつあると断言している。

「すべての人はわが前に腐りたり。而して、暗黒の力は人の子らの中にありてすべての天群の前に於て世を支配せり。

この故に世は静まり返り、すべての永遠なるものは苦しみ、天の使たちは世の毒麦を集めてこれを焼捨てんために世を刈り取る大命を待ちつつあり。」
(教義と聖約38：11，12)

このために、「ゆがみて片意地なる今の世の人々に」(教義と聖約33：2，34：6)「悔改めのほか何事をも」(教義と聖約6：9，11：9，18：6，19：21)語らないようにするという責任が聖徒たちに与えられたのである。

1830年、主はこのように宣言された。「而してわが葡萄園はことごとく朽ち腐り少数を除きて役に立つものなし。人々は多くの場合、祭司の偽善売教の故に道に違いすべて心腐りたり。」(教

義と聖約33：4)

さらにその1年後の1831年に、主は次のように言われた。「神の怒りはこの世に住める人々に向けて燃ゆ。而も善を行う者一人もなし、皆正しき道より外れたればなり。」(教義と聖約82：6)

主が妥協される御方ではないことは明白である。良い目的をもっていろいろな社会上、経済上、政治上の策を勞し、人類に平和と繁栄をもたらそうと尽くしても、人がキリストに戻らない限り、また戻るまで、その人が罪と悪の状態に陥っているという事実を変えることはできないのである。キリストこそ、救いの唯一の道である。

「されど全世界の人々は罪の中に伏し、暗黒と罪のかせとにうめき苦しめり。

これに由りて汝らは、彼らが罪のかせの下にあることを知るを得。そは彼らわが許に來らざるによりてなり。

およそわが許に來らざる者は罪のかせの下にあればなり。

またわが声を受け入れざる者はわが声を知らず、故にわれに属ける者にあらざるなり。

これに由りて、汝ら義しき者と悪しき者との區別を知り得ん。然も、全世界の人々は今なお罪と暗黒との下にうめくのを知り得ん。」(教義と聖約84：49—53)

これは不幸なことであるが、しかし聖典と歴史が証明しているように、「生命に至る」人が少ないのに比べ、罪と死の道にそれて行く人の数はおびただ

しい。この故に、世は自ら裁きを招いている。なぜなら、主の「みたま」すなわち生命と平和の「みたま」は「常には人を励ま」さないからである(教義と聖約1：33)。しかし、御父がその子供たちを律法の要求から救うために、あらゆる力と方法と言葉を尽くしてこられたことは論ずるまでもない。主は次のような詩的な言葉で力強く訴えておられる。

「汝ら地の国民よ、
めんどりがその雛を翼の下に集むる如く
われ汝らを集めんとせしこと幾度ぞや
されど汝らは好まざりき。
われ、わが僕らの口、
天使らの導きと恵みを与うること、
われ自らの声、
雷の声、
いなづまの聲、
暴風雨の聲、
地震と雹の聲、
飢饉とあらゆる疫病の聲、
ラッパの大なる響、
審判の聲、
一日中の慈悲の聲、
および光榮、 誉、
永遠の生命の富などの声によりて呼び、
汝らを永遠の救いを以て救わんと
なしたること幾度ぞや。
然も汝らは好まざりき。」

——教義と聖約43：24, 25

大きな裁きが始まるときに、「声を挙げて神をのろい死ぬる者たち」がいるであろう。(教義と聖約45：32)し

かし、彼らがそうすることは正しいとされない。というのも、その裁きは彼ら自身が自由意志を誤って使った当然の結果だからである。

末日の裁きに対しては、神ではなく人が結局は責任を負うのである。(教義と聖約109：49—53, 84：96, 98, 97：22—25参照) 主の計画は生命を与える計画である。従って、滅びがその計画の成就に先立つことは神の御意ではない。それは神の多くの子供たちの反抗的な行ないのために、神が止むを得ずお取りになる手段である。

「教義と聖約」の意図するところは末日の苦難を乗り越えた後に得られる祝福である。真の聖典であるが故に、この書は約束の書であり、民として個人として義人に大きな望みを告げる書である。

神の教会は「人に知られぬ所よりまた暗き所より」明るみに出されてきたのである。(教義と聖約1：30) 言わば、その召しと選びが確かなものになってきたのである。「他の民にわたされず」(ダニエル2：44)、「軋がり出でて、ついに全世界に充ち満つる」(教義と聖約65：2)とダニエルの語った王国の基だからである。教会は決して再び背教することはないであろう。

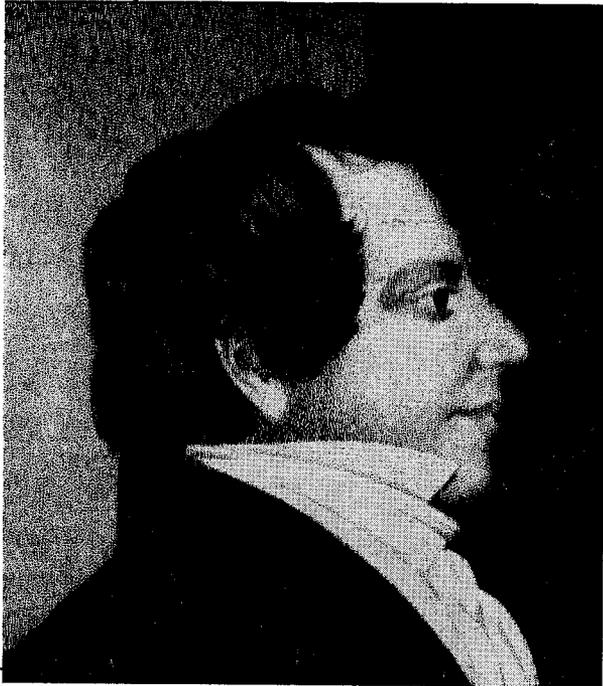
(教義と聖約38：9)

主は僕たちに「彼らの腕はわが腕にして、われは彼らの楯とならん……」と約束しておられる。(教義と聖約35：14) 「われ世界の四方より……わが選民を皆集めん」とも言っておられるからである。(教義と聖約33：6)

* * * * *

予言者ジョセフ 自ら綴る その性格

J・ルイス・テイラー



「回復の業を始めるに当たって、主は不屈の人、信頼できる、恐れを知らない人物、絶えず何にもまさって主に忠誠を尽くす者を必要とされた。予言者ジョセフは正にそのような人物であった。」

主の偉大なしもべのさつについて、私たちは皆よく理解したいと望むことであろう。その場合、その人自身が自分をどう思っていたかを知る以上によい方法はない。予言者ジョセフ・スミスは個人的な感想や自分の性格描写の宝庫とも言える記録を、合計3,200ページ[英文]に及ぶ「教会歴史(History of the Church)」の中に残している。ジョセフ・スミスは話すときも書くときも非常に率直であった。彼は自分の感じたことを、たいがいは無造作に公然と描写している。しかし時には表現に気を配っていることもある。ここにまとめたものは、予言者ジョセフの力強い性格と人物の大きさを少なくとも一瞥できる、彼自身の手になる人物描写である。

ドイツの偉大な歴史家エドワード・メイヤーは、かつてジョセフ・スミスとマホメットを比較したことがあった。メイヤーは、マホメットの方がジョセフ・スミスより上位に位置すると結論づけている。それは、マホメットには自己疑惑、迷いの時期、あるいは自分の宗教的な考え方を展開していくのに不安を覚えた時期があったのに対して、ジョセフ・スミスはそのような苦しい奮闘を経験していないからというのであった。予言者ジョセフ・スミスは宗教的な宣言を述べる時、その言葉は明瞭であった。また自分が神から召されていることについても、自分が教えているメッセージが神からのものであることについても全く疑念を抱かなかった。彼が自分の生涯の使命について述べている言葉を読みましょう。

「私は本当に示現を受けたのだ、私がどうして神に抗えようか。何故世の中の人々は、私が本当に見たものを見ないと言わせようと思うのか。私は示現を受けたのであるからそれが事実であることを身を以て知っている。私は神がそれを知りたもうことを知っている。私はそれを打ち消すことはできなかった。……」¹

「私はこの神権時代に、この偉大な業と王国の基礎を築くために、また散乱したイスラエルに向けて啓示された天父のみこころを証するために、天父から召された。……」²

「もしだれかにあなたは予言者であるかと聞かれたら、私は否定しないだろう。否定すれば嘘になるからである。……」³

自分が何者であるか、また何をしているかを知っていたので、ジョセフは「権威ある者のように」⁴力強く語った。

「私は自分が何を言っているかわきまえている。また自分の使命と務めを理解している。」⁵

「人類全般に影響を及ぼす力が私を受けていることについてはこう言おう。それは真理の力の結果なのであって、私は神のみ手の中にその教義を宣べる器になっている。私の方で強制しようとしているのではない、と。……私は荒野で呼ばれる者の声である。『罪を悔い改めて、人の子の来るのに備えて、道をととのえよ。神の王国があなたがたの所に来たからである。……』」⁶

「私は、世界が東になって神の業を滅ぼしにかかってきても、ものともしない。私は予言しよう。私のなすべき業が完成するまで、敵は決して私を殺すことができないだろう。そしてその完成のとき、私は死ぬ用意ができていようであろう。」⁷

回復の業を始めるに当たって、主は不屈の人、信頼できる、恐れを知らない人物、絶えず何にもまさって主に忠誠を尽くす者を必要とされた。予言者ジョセフは正にそのような人物であった。彼はジェームズ・アーリントン・ベネットに宛てた手紙に次のように書いている。「私は今まで人の顔、言いかえれば人の威勢を恐れたことは一度もない。私が恐れるのは、神のみ前にいるときである。私は神の怒りを招くことを恐れており、神の命じられることを守ろうと努めている。」⁸

またあるとき、予言者はこう宣言している。「私が目的とすることは、神に従順に従うことであり、人にも神が命じられるとおりに従うよう教えることである。その原則を人々が認めるか否かは問題ではない。たとえ私がつたひとりで残らなければならないとしても、私は常に真実の原則を曲げずに踏みとどまるつもりである。」⁹

ベネットに宛てたほかの手紙で彼はこう書いている。「全世界が私についてこう証するだろう。何世紀もの間、荒れ狂う大波に激しく打ちつけられてもそれに耐えてきた、大海の唯中にそびえ立つ岩のように、彼はゆるがぬ者であり、善の忠実な友である。また悪にとっては恐れを知らぬ敵である。……彼はすべての時代の誤ちと戦う……」¹⁰

ジョセフ・スミスが非常にうぬぼれの強い人だと感じる向きがあるかも知れないので、ここで彼がいつも主の助けがなければ何もできないと言っていたことと、私の成功は全く神の力によると言っていたことをつけ加えよう。彼は聖徒たちにこう話している。「全能の神が私の盾であり、私は神の僕である。」¹¹

またあるとき、彼は次のような意味のある言葉を述べている。



「私は自分の責任をある程度理解している。またこの民を教えるために至高者の助けと知恵を必要としていることも承知している。……」¹³「神の御子イエス・キリストは私の偉大な助言者である。」¹⁴

主を友とし、教師として、予言者は永遠の知恵を加えられた。今に至っては彼がどの程度福音の高い標準に達していたか、私たちには知る由もない。

「もし私が許され、人々も受ける備えができていれば、私は示現で示された王国の栄光について、百倍も詳しく説明することができるだろう。」¹⁵

予言者は「天の学問と知恵」¹⁶を愛した。そして彼はこの神聖な真理で聖徒たちを教化することを生涯の仕事とした。「私の心に波のように押し寄せてくる示現を、神の聖徒にどのように理解させればよいか知りたいと、私は終日思いをめぐらしており、それは私にとって、飲食にも換え難いものである。」¹⁷

真理を求める気持のない人があまりにも多いのを見て、彼の心が重くなったのも無理からぬことである。「優柔不断な人は非常に重要な事柄を目の前にしても、少しも心を動かさない。しかし私はあらゆることに真理を見出し、それを胸におさめたい。私は神がこれまでに啓示されたことはすべて信じる。……」¹⁸

ジョセフ・スミスは悪計をはかる人々によって踏みにじられる人ではなかった。虚偽の嫌疑にもかかわらず、法律の求める所に従って従順に法廷に立ったが、彼の人権が制約されそうときには必ず懸命に抗弁した。彼にとっては、悪人や誤った伝統、疫弊した諸信条に妨げられることなく、良心を自由に働かせること、すなわち思うままに自由に思考し、信じることを、以上に大切なものはなかったのである。彼は自分の感情を次のような特色のある文章で述べている。

「私の心を全人類に向けさせるものは、自由に対する愛、公民としての自由および宗教上の自由に対する愛である。自由を愛する私の心は、私をひざにすわらせてかわいがってくれた祖父たちから培われたものである。……」¹⁹

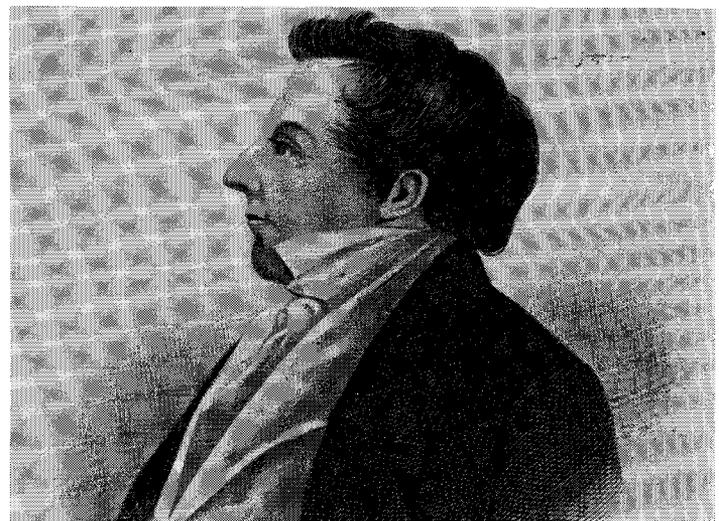
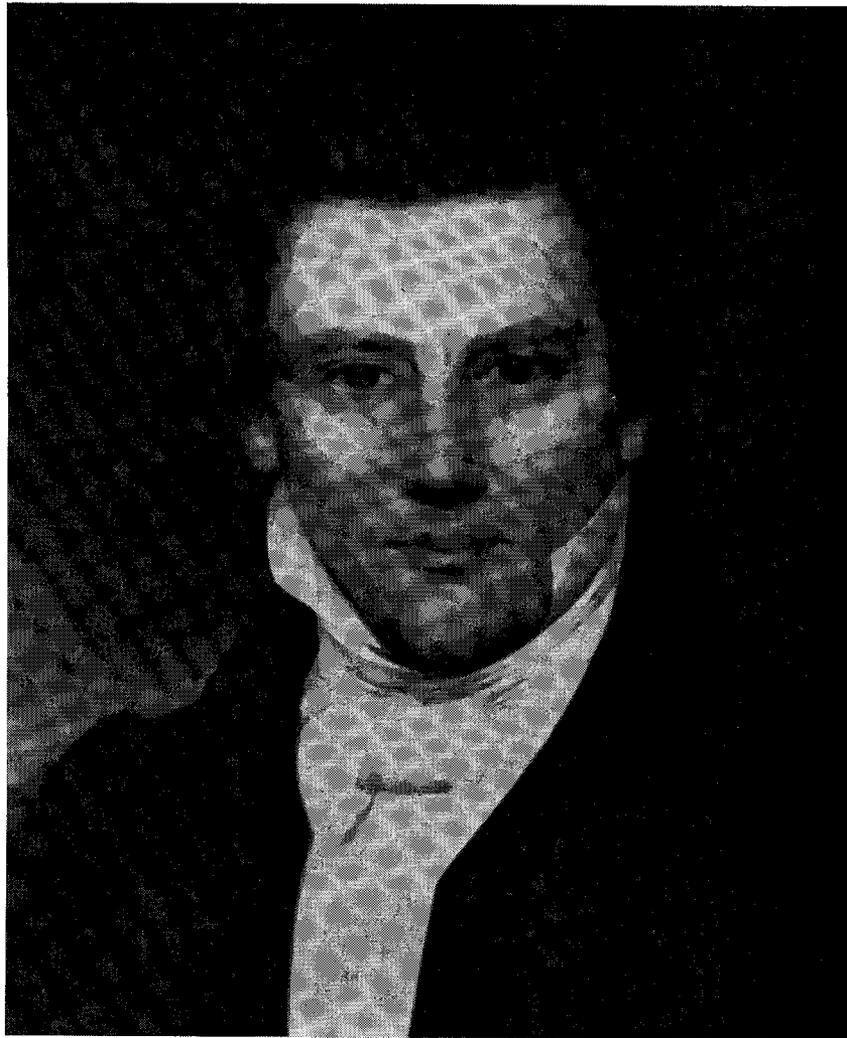
「私は気ままに考え、信じる自由が欲しい。妨げられないのはとても気持がよいものである。」²⁰

「いろいろな宗派の信条はいずれも信じることができない。すべての信条には何らかの真理があるが、いずれも私が同意できない何かを持っているからである。私は神のみ前に出でて、すべてのことを学びたい。しかし諸信条は柵をめぐらし、こう言う。『ここまでは来てよいが、それ以上は許さない。』私はそれに同意できないのである。」²¹

「私は、自由を守るためには、心臓を突き刺されてもかまわない。彼ら〔ミズーリ州の人々〕には私たちの権利を剝奪させるわけにはいかない。……」²²

彼の自由を愛する心に極めて近いものに、強い愛国心がある。「自分の国のために命を失うこと、これは本望であって、それ以上のものはない」²³と、彼はノーヴー軍団に語っている。また自分のことを「愛国者」²³と呼んで次のように宣言している。「私は今日地上に存在する合衆国の憲法を、だれにも劣らないくらい擁護する者である。私はいつでも弱い人、圧迫された人々の正当な権利を守るためには、今すぐ死んでもよい。」²⁵

その4カ月後に、彼は次のように言っている。「傷ついた無実の人々を保護するために、私が合衆国で正当な力を持ちたいと願うのは、私の権利であり、特権であると思う。もし何か良いことのために命を失うとしたら、私は喜んで次のことのために犠牲になりたい。すなわち、必要であれば人類の一般的な福利安寧のため合衆国の法律と憲法を維持するべく、徳と正義と真理の祭壇にのぼろう。」²⁶



予言者ジョセフ・スミスの肖像画：539ページ、デビッド・ロジャーズの描いた横顔。540ページ、エドワード・グリッグウェア画。上ワシントンD. C.の国立肖像画美術館にある肖像画。下、1842年にデビッド・ロジャーズが描いた絵の図版。予言者は「教会歴史 (History of the Church)」第5巻〔英文〕P. 164, 165でこの肖像画のために1842年9月16, 17, 19, 20日にわたってポーズをとったと書いている。

予言者は鋼鉄のような硬さと、ピロードのような柔らかさを兼ね備えていた。「諸派の聖職者は、私のことでぶつぶつ言い、こう尋ねる。『どうしてこのおしゃべりはあんなに信者を集めて、失うことがないのだろうか。』それは私が愛の原則を知っているからである。私がこの世に提供できるものは、良い心と良い手である。』²⁷

「……私の心は全人類を受け入れるだけの広さがある。』²⁸「私はだれに対しても敵意を抱いていない。私はすべての人を愛している。』²⁹ その愛の深さを次のような表現から測ることができる。

「私は聖徒たちのために仕え、すべての人の僕になることを喜びとしている。……」³⁰

「私は学識のある者ではない。しかしだれに対しても良い感情を抱いている。一度でもよいから私の友に対して持っている感情を、天使長の言葉で語ることができれば何とすばらしいことだろうか。しかし、決して現世でそれができるとは思っていない。人が喜べば私も喜び、人が悲しめば、私も悲しむ。』³¹

「もう一度友に会って、友のために働き、慰めを与えるために仕えたいと願っている。私が生きている間、彼らは友を得たいと思わないであろう。しかし私の心は彼らを愛し、私の手は彼らのために働く。……」³²

「私は年をとるにつれて、あなたがたに対する心がやさしくなってくる。私はこの民の高潔な指導者になりたいので、いつでも間違っているものはすべて喜んで捨て去るつもりである。』³³

人々に対する予言者の純粋な愛は、彼の第一の愛、すなわち主と主の正義に対する愛から出てくるものであった。彼は扶助協会の姉妹たちにこう語っている。「私たちが天父なる神に近づけば近づくほど、私たちは道はずれている人々を同情の念をもって見るができるようになる。彼らを肩に乗せてあげたい気持ちになる。……」³⁴

予言者がよく口にした言葉は、彼が日誌に次のように書いている言葉である。「……この神聖な教義を……私は胸の中に暖かく抱いている。また決して消し去ることのできない熱意をもって大切にしている。私は友情を大切に、真理を愛している。善と法則を愛し、またアブラハム、イサク、ヤコブの神を愛している。……」³⁵

神の予言者は同時に普通の人間でもあった。そのことは彼に従う人々より、予言者自身がよく知っていた。ジョセフ・スミスはこう言っている。「予言者は、その職にある者として行動しているときにだけ予言者なのである。』³⁶

ジョセフ・スミスは、聖徒たちを前にして非常に卒直に自己評価をし、自分が不完全であることを告白し、同時に改善してゆきたいと希望を述べている。公衆を前に語った次の文を考えてみよう。

「私も他の人々や昔の予言者たちと同じように、感情の影響を受けやすい者である。私には欠点があるが、人の弱点を負わなければならない立場にある。……」³⁷

「私は彼ら（聖徒たち）に、私がただの人であるから、完全な私を期待してはならないと話した。もし私に完全さを期待するなら、私も彼らに完全な姿を期待するだろう。逆に聖徒たちが私の欠点に耐えてくれるなら、……私も同様に彼らの欠点に耐えてゆこう。』³⁸

しかしここでジョセフ・スミスの罪が深刻なものであったと考える必要はない。というのは、彼が言っているように、「罪を犯す性質は生来決してなかった。』³⁹ からである。彼が死ぬ間際に口にした有名な言葉は、彼がへりくだって主に赦しを願った結果どのような心境にあったかを示している。

「私の良心は、神に対しても、全人類に対しても一切罪の意識

を感じていない。』⁴⁰

彼の人生の様々な側面の中でも、敵の攻撃を受けたときに見せた反応以上に、彼の不屈の精神を示すものはない。彼は生涯にわたって平和な日というものをめったに迎えたことがなかった。しかし、この苦難も彼の霊を鍛練する役割を果たしたのであった。

「私は高い山からころがり落ちる巨大なごつごつした石のようなものである。この石の角はほかのものが加速度的な勢いでぶつかるとき、だんだん滑らかになっていく。その相手には、偏見を持つ宗教家、政略をめぐる聖職者、術策にたけた法律業者、策略に心を奪われた学者、虚偽を書く編集者、買収された裁判官と陪審員、さらには暴徒や神を冒瀆する者、みだらな男女にそこの角をかき立て偽証する行政官があり、地獄の全勢力がここかしの角をけずっていく。このようにして私は全能者の矢筒にある滑らかで磨かれた矢となっていくのである。全能者は上記の者すべてを治める統治権を私に下さるだろう。そのとき、彼らの虚偽のかくれ家はくずれ、身をひそめていた所は破壊され、私が出席したこれらの別の滑らかに磨かれた石は傷つくことだろう。』⁴¹

「興奮が私の人生の実体になってしまっていて、それがなくなると気が抜けたように思われる。』⁴²

以上のような試練に遭いながらも献身してきたので、神は彼を高きにあげ、永遠に共に住まおうと約束された。(教義と聖約121:8, 122:9参照)

以上はただ予言者の著しい性格を瞥見したにすぎないが、これだけで判断しても、彼の性格は印象的である。彼の生涯や彼の語ったメッセージ、人々に及ぼした影響、さらには今日も及ぼし続ける影響を考え合わせると、彼の性格のすばらしさが一層良くわかるのである。

(注)

1. ジョセフ・スミス2:25
2. 聖徒たちへの説教、1843年7月。「教会歴史」(一般に「教会歴史記録」と呼ばれている)5:516
3. ダグラス判事その他の会話、1843年1月。「教会歴史」5:215
4. 新しく到着した英国の聖徒への言葉、1843年4月。「教会歴史」5:356
5. 聖徒たちへの説教、1843年1月。「教会歴史」5:259
6. 聖徒たちへの説教、1844年3月。「教会歴史」6:273
7. 聖徒たちへの説教、1843年10月。「教会歴史」6:58
8. ジェームス・アーリントン・ベネットへの手紙、1842年9月。「教会歴史」5:157
9. 集会室における説教、1844年2月。「教会歴史」6:223
10. ジェームス・アーリントン・ベネットへの手紙、1843年11月。「教会歴史」6:78
11. 聖徒たちへの説教、1843年1月。「教会歴史」5:259
12. キング・フォレットの葬儀における説教、1844年4月。「教会歴史」6:305
13. 十二使徒への書簡、1840年10月。「教会歴史」4:230
14. 「パーセントの少年たち」に語った話、1843年11月。「教会歴史」6:93
15. 聖徒たちへの説教、1843年5月。「教会歴史」5:402
16. 聖徒たちへの説教、1843年6月。「教会歴史」5:423
17. 葬儀における説教、1843年4月。「教会歴史」5:362
18. 聖徒たちへの説教、1844年6月。「教会歴史」6:472
19. 聖徒たちへの説教、1843年7月。「教会歴史」5:498
20. 聖徒たちへの説教、1843年4月。「教会歴史」5:340
21. 聖徒たちへの説教、1843年10月。「教会歴史」6:57
22. ノーヴンにおける演説、1843年6月。「教会歴史」5:473
23. ノーヴン軍団に語った言葉、1841年7月。「教会歴史」4:382
24. ジェームス・アーリントン・ベネットへの手紙、1842年9月。「教会歴史」5:159
25. 聖徒たちへの説教、1843年10月。「教会歴史」6:56, 57
26. 政治的な集まりにおける話、1844年2月。「教会歴史」6:210
27. 聖徒たちへの説教、1843年7月。「教会歴史」5:498
28. ワントン・タッカーへの手紙、1844年6月。「教会歴史」6:459
29. キング・フォレットの葬儀における説教、1844年4月。「教会歴史」6:317
30. エドワード・ハンターへの手紙、1842年1月。「教会歴史」4:492
31. 葬儀における説教、1843年4月。「教会歴史」5:362
32. 日誌の注釈、1842年8月。「教会歴史」5:109
33. 聖徒たちへの説教、1844年5月。「教会歴史」6:412
34. 扶助協会への言葉、1842年6月。「教会歴史」5:24
35. 日誌の注釈、1842年8月。「教会歴史」5:108
36. ある聖徒との対話、1843年2月。「教会歴史」5:265
37. 説教、1843年7月。「教会歴史」5:516
38. 新しく到着した聖徒たちへの忠告、1842年10月。「教会歴史」5:181
39. ジョセフ・スミス2:28
40. カーセージへの道で語った言葉、1844年6月。「教会歴史」6:555
41. 聖徒たちへの説教、1843年5月。「教会歴史」5:401
42. 聖徒たちへの説教、1843年5月。「教会歴史」5:389

テイラー兄弟は、ワシントン大学に隣接するシアトル(ワシントン州)インスティテュートの指導主事であり、シアトル南部ステーク部の高等評議員である。

末日聖徒の讚美歌著作の指針

タバナクルオルガン奏者

アレグザンダー・シュライナー

教会の集会の話し手は、神からたまわった福音の喜ばしい知らせを述べるときに、豊かな想像力と豊富な資料と独自の考えのほどを披瀝する。末日聖徒の詩人や音楽家も、天父をたたえ、回復された福音の恵みを感謝する新しい讚美歌、独唱曲、カンタータなどを作曲するにあたって、それと同様の精力を注ぎ込むべきである。

昔から歌われている讚美歌が最高の讚美歌だとよく言われる。それは恐らく、慣れ親しんだ曲は旧友のような感じで、しかも長い年月を通じて親しまれ、愛されてきた多くの讚美歌の中からえり抜かれてきたからであろう。

そうとはいえ、聖典の中にこのような言葉がある。「主をほめたたえよ。主にむかって新しい歌をうたえ。聖徒のつどいで、主の誉を歌え。」（詩篇149：1）またイザヤ書には次のように記されている。

「主にむかって新しき歌をうたえ。地の果から主をほめたたえよ。海とその中に満ちるもの、海沿いの国々とそれに住む者とは鳴りどよめ。」（イザヤ42：10）天父の御前に新しい讚美の歌を歌えというこのふたつの言葉は、聖典中に数多く言われているほんの一例にすぎない。

説教の際に新しい解釈を加えるのと同様に、私たちは時代に即応するよう心がけ、現代に訴える新しい讚美歌を作曲するとよいと思う。近代的、現代

的な形式を採用すると、現代人の好みに合った音楽ができよう。

将来、現在の讚美歌は改訂されるであろう。しかし、新版を編集できるだけの新しい讚美歌が集まるまでは、その必要はない。ある人々は単に自分の好みを反映するだけの新しい讚美歌集を考えているが、良い讚美歌集は新しい讚美歌と同時に古くから親しまれた良い讚美歌も入った範囲の広いものでなくてはならない。

今日の私たちに課せられた仕事、また目標とするところは、与えられたチャレンジは、教会一流の靈的で優秀な作詞者、作曲者たちの才能を生かした新しい讚美歌を数多く生み出すことである。

そのような作詞者たちには、作詩に必要な才能に加えて、福音と教会に対する深い愛情がなければならない。偉大な詩人の作品によく通じ、作品の良さを自分に取り入れるべきである。

作曲者は自己の音楽的才能を発揮することは言うに及ばず、すぐれた音楽作品に親しみ、たとえばモーツァルトやベートーベンのすばらしいソナタを愛し、理解すべきである。そうでなければ、彼らの作品は、当節流行の息の短かいポピュラー音楽の表現の域を出ないで終わってしまうかもしれない。

私たちを取り巻く環境が年ごとに、近代的に複雑にまた興味深くなることから、新しい主題、より強力な主題、



予言者は鋼鉄のような硬さと、ピロードのような柔らかさを兼ね備えていた。「諸派の聖職者は、私のことでぶつぶつ言い、こう尋ねる。『どうしてこのおしゃべりはあんなに信者を集めて、失うことがないのだろうか。』それは私が愛の原則を知っているからである。私がこの世に提供できるものは、良い心と良い手である。』²⁷

「……私の心は全人類を受け入れるだけの広さがある。』²⁸「私はだれに対しても敵意を抱いていない。私はすべての人を愛している。』²⁹ その愛の深さを次のような表現から測ることができる。

「私は聖徒たちのために仕え、すべての人の僕になることを喜びとしている。……」³⁰

「私は学識のある者ではない。しかしだれに対しても良い感情を抱いている。一度でもよいから私の友に対して持っている感情を、天使長の言葉で語ることができれば何とすばらしいことだろうか。しかし、決して現世でそれができるとは思っていない。人が喜べば私も喜び、人が悲しめば、私も悲しむ。』³¹

「もう一度友に会って、友のために働き、慰めを与えるために仕えたいと願っている。私が生きている間、彼らは友を得たいと思わないであろう。しかし私の心は彼らを愛し、私の手は彼らのために働く。……」³²

「私は年をとるにつれて、あなたがたに対する心がやさしくなってくる。私はこの民の高潔な指導者になりたいので、いつでも間違っているものはすべて喜んで捨て去るつもりである。』³³

人々に対する予言者の純粋な愛は、彼の第一の愛、すなわち主と主の正義に対する愛から出てくるものであった。彼は扶助協会の姉妹たちにこう語っている。「私たちが天父なる神に近づけば近づくほど、私たちは道はずれている人々を同情の念をもって見ることができるようになる。彼らを肩に乗せてあげたい気持ちになる。……」³⁴

予言者がよく口にした言葉は、彼が日誌に次のように書いている言葉である。「……この神聖な教義を……私は胸の中に暖かく抱いている。また決して消し去ることのできない熱意をもって大切にしている。私は友情を大切に、真理を愛している。善と法則を愛し、またアブラハム、イサク、ヤコブの神を愛している。……」³⁵

神の予言者は同時に普通の人間でもあった。そのことは彼に従う人々より、予言者自身がよく知っていた。ジョセフ・スミスはこう言っている。「予言者は、その職にある者として行動しているときにだけ予言者なのである。』³⁶

ジョセフ・スミスは、聖徒たちを前にして非常に卒直に自己評価をし、自分が不完全であることを告白し、同時に改善してゆきたいと希望を述べている。公衆を前に語った次の文を考えてみよう。

「私も他の人々や昔の予言者たちと同じように、感情の影響を受けやすい者である。私には欠点があるが、人の弱点を負わなければならない立場にある。……」³⁷

「私は彼ら（聖徒たち）に、私がただの人であるから、完全な私を期待してはならないと話した。もし私に完全さを期待するなら、私も彼らに完全な姿を期待するだろう。逆に聖徒たちが私の欠点に耐えてくれるなら、……私も同様に彼らの欠点に耐えてゆこう。』³⁸

しかしここでジョセフ・スミスの罪が深刻なものであったと考える必要はない。というのは、彼が言っているように、「罪を犯す性質は生来決してなかった」³⁹ からである。彼が死ぬ間際に口にした有名な言葉は、彼がへりくだって主に赦しを願った結果どのような心境にあったかを示している。

「私の良心は、神に対しても、全人類に対しても一切罪の意識

を感じていない。』⁴⁰

彼の人生の様々な側面の中でも、敵の攻撃を受けたときに見せた反応以上に、彼の不屈の精神を示すものはない。彼は生涯にわたって平和な日というものをめったに迎えたことがなかった。しかし、この苦難も彼の霊を鍛練する役割を果たしたのであった。

「私は高い山からころがり落ちる巨大なごつごつした石のようなものである。この石の角はほかのものが加速度的な勢いでぶつかるとき、だんだん滑らかになっていく。その相手には、偏見を持つ宗教家、政略をめぐらす聖職者、術策にたけた法律業者、策略に心を奪われた学者、虚偽を書く編集者、買収された裁判官と陪審員、さらには暴徒や神を冒瀆する者、みだらな男女にそそのかされて偽証する行政官があり、地獄の全勢力がここかしこの角をけずっていく。このようにして私は全能者の矢筈にある滑らかで磨かれた矢となっていくのである。全能者は上記の者すべてを治める統治権を私に下さるだろう。そのとき、彼らの虚偽のかくれ家はくずれ、身をひそめていた所は破壊され、私が出会ったこれらの別の滑らかに磨かれた石は傷つくことだろう。』⁴¹

「興奮が私の人生の実体になってしまって、それがなくなると気が抜けたように思われる。』⁴²

以上のような試練に遭いながらも献身してきたので、神は彼を高きにあげ、永遠に共に住まおうと約束された。（教義と聖約121：8，122：9参照）

以上はただ予言者の著しい性格を瞥見したにすぎないが、これだけで判断しても、彼の性格は印象的である。彼の生涯や彼の語ったメッセージ、人々に及ぼした影響、さらには今日も及ぼし続ける影響を考え合わせると、彼の性格のすばらしさが一層良くなるのである。

(注)

1. ジョセフ・スミス2：25
2. 聖徒たちへの説教，1843年7月。「教会歴史」[英文]（一般に「教会歴史記録」と呼ばれている）5：516
3. ダグラス判事その他との会話，1843年1月。「教会歴史」5：215
4. 新しく到着した英国の聖徒への言葉，1843年4月。「教会歴史」5：356
5. 聖徒たちへの説教，1843年1月。「教会歴史」5：259
6. 聖徒たちへの説教，1844年3月。「教会歴史」6：273
7. 聖徒たちへの説教，1843年10月。「教会歴史」6：58
8. ジョームス・アールリントン・ベネットへの手紙，1842年9月。「教会歴史」5：157
9. 集会室における説教，1844年2月。「教会歴史」6：223
10. ジョームス・アールリントン・ベネットへの手紙，1843年11月。「教会歴史」6：78
11. 聖徒たちへの説教，1843年1月。「教会歴史」5：259
12. キング・フォレットの葬儀における説教，1844年4月。「教会歴史」6：305
13. 十二使徒への書翰，1840年10月。「教会歴史」4：230
14. 「パーモントの少年たち」に語った話，1843年11月。「教会歴史」6：93
15. 聖徒たちへの説教，1843年5月。「教会歴史」5：402
16. 聖徒たちへの説教，1843年6月。「教会歴史」5：423
17. 葬儀における説教，1843年4月。「教会歴史」5：362
18. 聖徒たちへの説教，1844年6月。「教会歴史」6：472
19. 聖徒たちへの説教，1843年7月。「教会歴史」5：498
20. 聖徒たちへの説教，1843年4月。「教会歴史」5：340
21. 聖徒たちへの説教，1843年10月。「教会歴史」6：57
22. ノーヴーにおける演説，1843年6月。「教会歴史」5：473
23. ノーヴー軍団に語った言葉，1841年7月。「教会歴史」4：382
24. ジョームス・アールリントン・ベネットへの手紙，1842年9月。「教会歴史」5：159
25. 聖徒たちへの説教，1843年10月。「教会歴史」6：56，57
26. 政治的な集まりにおける話，1844年2月。「教会歴史」6：210
27. 聖徒たちへの説教，1843年7月。「教会歴史」5：498
28. ワシントン・タッカーへの手紙，1844年6月。「教会歴史」6：459
29. キング・フォレットの葬儀における説教，1844年4月。「教会歴史」6：317
30. エドワード・ハンターへの手紙，1842年1月。「教会歴史」4：492
31. 葬儀における説教，1843年4月。「教会歴史」5：362
32. 日誌の注釈，1842年8月。「教会歴史」5：109
33. 聖徒たちへの説教，1844年5月。「教会歴史」6：412
34. 扶助協会への言葉，1842年6月。「教会歴史」5：24
35. 日誌の注釈，1842年8月。「教会歴史」5：108
36. ある聖徒との対話，1843年2月。「教会歴史」5：265
37. 説教，1843年7月。「教会歴史」5：516
38. 新しく到着した聖徒たちへの忠告，1842年10月。「教会歴史」5：181
39. ジョセフ・スミス2：28
40. カーセージへの道で語った言葉，1844年6月。「教会歴史」6：555
41. 聖徒たちへの説教，1843年5月。「教会歴史」5：401
42. 聖徒たちへの説教，1843年5月。「教会歴史」5：389

テイラー兄弟は、ワシントン大学に隣接するシアトル（ワシントン州）インスティテュートの指導主事であり、シアトル南部ステーク部の高等評議員である。

作詞者たちは偉大な詩人の作品によく通じ、
たとえばモーツアルトやベートーベンのすば
らしいソナタを愛し理解すべきである。

時宜を得た主題、信仰を増す主題、心
暖まる主題などを用いて讃美歌を作曲
するよう奨励すべきである。

上にあげたような主題を詩に表わし
それをもって天父の御名をあげ、す
ばらしい祝福に対するわれわれの感謝
を表わすことを才能ある教会員に勧め
ようではないか。

技術的に言うと、歌詞こそが讃美の
歌であり、讃美歌調のメロディーがそ
れに伴う。讃美の歌すなわち歌詞がま
ず書かれなければならない。作詞者が
詩の題に合う拍子を選び、それから作
曲者がその讃美歌の曲を作る。しかし
ながら作詞者は聞きなれた曲を使い、
その韻律にのせて歌詞を書きたい場合
もあろう。例えば、「悩めるイスラエ
ル」と同じメロディーの曲は何十曲と
あるが、それらは皆同じようにきれい
に歌うことができる。これは異論のな
いところである。「イスラエルの救い
主」、「わが神わが王」その他多くの
曲が、新しい歌詞をつけるのに使われ
るであろう。従って、古い曲に新しい
歌詞をつけることも、新しい歌詞のた
めに新しい曲を作ることもできる。

教会の讃美歌集には、近代に回復さ
れた福音を歌った、特に私たちにとっ
て意義深く神聖な讃美歌が多いので、
その中に手本をとることができる。

讃美歌は、祈りとして神に捧げられ
るひとつの詩である。古代ギリシャ人
は異教の神々に讃美を歌った。私たち

は永遠の神である天父に歌う。私たち
は大部分の讃美歌を天への祈りとして
捧げるべきである。

予言者ジョセフへの啓示の中で、主
は言われた。「……然り、義しき者の
歌はわれに対する祈りなり。……」（教
義と聖約25：12）この聖句の典型とし
て、「感謝を神にささげん」、「わが神
わが王」、「高きに栄えて」の歌を考
えてみなさい。

使徒パウロも讃美歌について教え
た。「キリストの言葉を、あなたがた
のうちに豊かに宿らせなさい。そし
て、知恵をつくして互に教えまた訓戒
し、詩とさんびと霊の歌とによって、感
謝して心から神をほめたたえなさい。」
（コロサイ3：16）

これは、パウロが、当時用いられて
いた数種類のタイプの讃美歌について
何らかの理解を持っていたことを示す
ものである。パウロはまた、旧約聖書
の数名の予言者が勧告したことをここ
で繰り返している。すなわち、「感謝
して心から神をほめたたえ」ながら歌
いなさいということである。

讃美歌は技術的に、最低5種類のタ
イプに分類される。それは純粋な讃美
歌、詩の歌、霊の歌、合唱の歌、いわ
ゆるゴスペル（福音の歌）である。

純粋な讃美歌：理想的な讃美歌と
は、神に捧げる神聖な歌である。その
ような讃美歌は、私たちの讃美歌集の
中で最も大切なものである。それはい

つも霊的な性質を持ち、霊的であるこ
とが一番重んじられるからである。

詩の歌：パウロは詩の歌（聖歌）
について述べている。これは旧約聖書
から取られた讃美歌である。詩篇は西
洋世界で最も愛されている最も格調の
高い詩である。

カルビン派は讃美歌の中でもこの聖
歌をとりわけよく歌う。詩の歌はエホ
バに捧げられるが、イエス・キリスト
の生涯や使命を歌った歌はあっても、
イエス・キリストの名前は出てこない。
われわれの讃美歌集には、「主はわが
羊飼」、「たたえてみ業に」など詩の
歌が数曲含まれている。

霊の歌：礼拝者の心を高め、励ま
して、神よりも人に向けられるため、
このように言われる。この歌はあたか
も主の御前で歌うように歌われる。
「恐れず来たれ聖徒」、「また旅にい
で立たん」、「部屋を出る前に」の歌
はこの部類に入る。

合唱の歌：単調なことが主な特徴
である。そのため歌は非常に荘厳であ
る。「神はわが岩」はこの類である。

ゴスペル：ゴスペル（福音の歌）
という言葉は、内容が福音に触れるこ
とはまれであるので、実の所は誤った
呼び方である。ゴスペルは、18世紀に
アメリカ合衆国で熱心な福音復興伝道
者たちにより広く流布した。この種の
ものに「日の照る間に働け」、「戦い
止むまで」などがある。総体的に見て

これらの讃美歌は、言わんとする所を強烈に訴える力は持っていますが、詩的あるいは音楽的に特に高度とは考えられない。

良い讃美歌を作るには、出だしを題に使えるようなしっかりした歌詞で始めることである。第1連をその強力な歌詞で始め、それが他の各連にも中心テーマとならなくてはならない。(現在の讃美歌集に含まれているものは大体3連から4連のものである。)

讃美歌の歌詞が一貫した概念を持たない場合もある。古い形式の讃美歌は例えば「イスラエルの救い主、われらの喜び」では、初めの歌詞が題になっているばかりでなく、讃美歌全体の中心テーマとなるように作られている。それに続く歌詞は皆、車輪のスポークが中心のこしきに集まるのと同じように、中心テーマに結びつく。この方法ではどの連も前の連と無関係である。

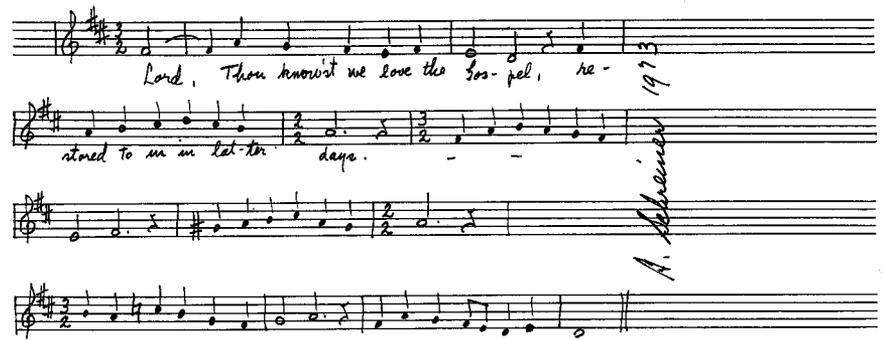
その反対に各連が詩のように一貫している讃美歌のあることはだれでも知っている。そのような場合にはすべての連を歌うことが筋であろう。ヒーバー・J・グラント大管長が、聖徒たちは「高きに栄えて」を歌う場合、できる限り全節を通して歌うようにと勧めたのはそのためである。

私たちは特に回復された福音に題を取って新しい讃美歌を書くといよいであろう。作詞者たちが私たちの時代の主の偉大な御業を歌うならば、主は彼ら

を恵み、人々は感謝し、主の御業は進められ、バプテスマを受けて教会に入ったばかりの人々は靈感を受けて信仰を強められるであろう。

次に主題を幾つかあげてみる。

1. 現在の讃美歌集に含まれている



讃美歌を、新たにより良く構成し直す。

2. 教会幹部の説教を参考にして適切な概念をまとめる。
3. 老いも若きも神聖なモルモン経という書物を愛するように、モルモン経について歌った讃美歌が必要である。
4. 現在の讃美歌の中でも、福音の回復を喜び歌った歌は美しい。福音の回復についての歌はとりわけ荘厳で気品があって、信仰を高めるものとならずである。
5. 現代の教会の働きや忠実に召しを果たすことについて歌った新しい讃美歌が必要である。
6. 子供や改宗者が、バプテスマを受けて教会に入るといふ神聖なすばら

しい出来事を歌を通して感じ取るように、バプテスマについての讃美歌が必要である。

また私たちは死者のためのバプテスマの意味を理解する唯一の民である。この主題も用いることができよう。

7. 教会には荘厳なたたずまいのうちに清らかな雰囲気をかもし出す数々の新しい神殿がある。私たちには、神殿に入った喜びと神の神聖な目的に近づいたことを告げる讃美歌が必要である。

8. 教会は世界各地で異常なほどの発展をたどっている。中南米の伝道部では新教会員が続々と生まれている。だれかが、リーハイの子孫であるこの民について書く必要がある。福音は東洋の人々にも急速に広まっている。すべての民の父である御方は、あらゆる国の新しい聖徒たちに友好の歌の手を伸ばすことを喜ばれるであろう。

9. 聖餐式についてさらに美しい歌が必要である。

聖歌隊は私たちの時代やその必要
希望、恐れ、信仰についての歌を
喜んで歌うことであろう。

10. 効果的な伝道事業について新しい歌を書く必要がある。どのようにして改宗したのだろうか。その人はどう感じているだろうか。その喜びの源は何だろうか。

讚美歌の作曲について考えていると信仰を高める頌歌の歌詞が心に浮かぶかもしれない。聖歌隊は私たちの時代やその必要、希望、恐れ、信仰についての歌を喜んで歌うことであろう。

福音をテーマにして新しい独唱曲を作曲する機会も多いであろう。バッハの書いたような合唱用のカンタータや叙唱（あるいは物語詩）、独唱、重唱、合唱のカンタータの作曲を一考してみるべきである。

若者の歌や楽しい子供の歌を使うこともできる。中にはレクリエーション向けの歌もある。しかしそれらは皆信仰を強めるというはっきりした性格を持たなくてはならない。

讚美歌を作り上げたら、作詞者は最初の作品が傑作になるなどと期待しないで謙遜になること。初めに何曲も作ってそれが練習となり、力と技術を磨いて立派な曲を書くということがままあるものである。

作曲者へのチャレンジは、何らかの現代性を持ち合わせており、しかも私たちの心を捕え、気持よく心を打つ新しい讚美歌を作ることである。

前のページに載せたメロディーは、耳慣れた讚美歌のメロディーやリズム

と少々異なっている。作詞者は、練習にこの曲を用いているいろ作詞してみるとよいであろう。

カソリックの讚美歌作者たちは何世紀も前に、聖句や教会の書籍を使って聖歌を作った。ルーテル派信者は多くの美しい信仰にあふれた合唱曲を作って宗教界に大きな貢献をした。メソジスト派その他のプロテスタント信者は数多くの讚美歌を書いた。回復された私たちの教会はごく初期の時代に福音の回復への感謝を表わす讚美歌を数多く作った。今世紀、今度は私たちが大きな貢献をする番である。

新たに編集される讚美歌集には、新しい傑作を最低100曲は入れたい。しかしふさわしい曲を100曲選ぶには、その10倍もの曲が必要である。

讚美歌は必ずしも偉い詩人が書いたものと限らない。すばらしい讚美歌を書いた人は、主を愛して自分の心を美しい詩的な言葉で表現できた人であった。そこには詩の要素が高度に要求される。それは、讚美歌は何百回となく歌われるものであり、歌うごとに靈感が与えられるようであってほしいからである。すなわち、讚美歌は作詩の心得がある深い信仰の持ち主によって書かれるべきである。

讚美歌を作詞する人は、適当な手本を胸にたたんでおくべきであるが、ポップラーなロマンチックバラード形式は避けなくてはならない。そのような

軽い形式は1、2回歌うぶんには良いが、すぐに人々からあきられてしまうであろう。末永く愛されるには、私たちの心と生活に気高い思いを印象づける言葉でなくてはならない。

作詞者、作曲者たちは、自分たちを高めるためにはもちろんのこと、世の人々に向けても歌えるように、モルモンの持つ価値ある事柄の描写を試みるべきである。そのような讚美歌には、神聖な伝道に対する深い信念がうかがわれるはずである。

讚美歌の目的は、音楽の伴奏により信仰ある人々と共に天父に祈りを捧げること、福音に対する思いと感情を清らかにすること、福音の原則を愛し、いつくしみ、理解し、従うように導くこと、そしてその場の人々を信仰と忠実さと兄弟の愛でひとつに結ぶことである。歌詞をのせたメロディーは、イザヤの予言を成就する。天の神がその民を慰め、その中に喜びと楽しみとがあるとき、そこには感謝と歌声とがあるであろう。（イザヤ51：3参照）

私たちのすべての民に、弱きも強きも、貧者も富者も、老いも若きもすべて、私たちの書く讚美の歌の美と栄光と力と神聖さをもって靈感を与えようではないか。

シュライナー兄弟は1924年以来タバナクル聖歌隊のオルガン奏者の任にある。

クリスマスのものがたり

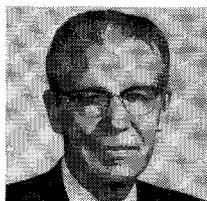
え：ラリー・ウインボーク

さて、この^{ち ほう}地方で^{ひつじかい}羊飼たちが^{よる}夜、^{の じゆく}野宿しながら^{ひつじ}羊の^む群れの^{ばん}番をしていた。すると^{しゆ}主の^み御使が^{つかい}現れ、^{あらわ}主の^{しゆ}栄光が^{えい こう}彼らを^{かれ}めぐり^{てら}照したので、^{かれ}彼らは^{ひ じょう}非常に^{おそ}恐れた。御使は^{み つかい}言った、「^い恐れるな。^み見よ、^{たみ}すべての^{あた}民に^{おお}与えられる^{おそ}大きな^{よろこ}喜びを、^{つた}あなたがたに^{おそ}伝える。きょう^{うま}ダビデの^{まち}町に、^{すくいぬし}あなたがたのために^{うま}救主がお生れになった。この^{しゆ}かたこそ^{おさ}主なる^ごキリストである。あなたがたは、^{おさ}幼な^こ子が^{ぬの}布にくるまって^{かい ば}飼葉^{なか}おけの^ね中に^み寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに^{あた}与えられるしるしである。

ルカ 2 : 8 - 12

世界中の子どもたちにおくる クリスマスのことば

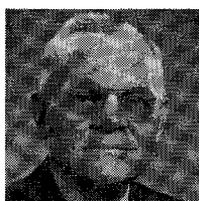
大管長会



タナー 副管長



リー 大管長



ロムニー 副管長

クリスマスはよろこびにあふれるときです。世界中の子どもたちがこの聖なる季節をいろいろな方法でいいます。でもこのクリスマスはとくべつな日です。世界中どこでも、ずっとむかしベツレヘムという小さな町のユダヤの丘の近くで生まれたおきな子を記念する日なのです。

クリスマスにあかりはかかせません。人々は家の中や木や通りや店のウィンドウにあかりをつけます。オーストリアではクリスマスになると、家族がたいまつを持ってぎょうれつをつく

り、歌を歌いながら雪のアルプスをねり歩いて教会へ行きます。あの最初のクリスマスの夜、天に光がかがやきました。とくにまばゆいひとつの星がおきな子イエスのいる馬小屋をてらしました。はるかかなたの「新世界」でも、天にまばゆい光がかがやくのが見えました。そして夜になっても暗くならなかったので、モルモン経の予言者たちが予言したようにキリストがお生まれになったことがわかりました。

クリスマスには歌を歌います。最初のクリスマスは、神を賛美する天使たちによって知らされました。いまは、町かどや家の前でよく知られたクリスマスキャロルを歌います。教会の集会やプログラムでクリスマスやおきな子の誕生の歌を歌う子どもたちの目は光りかがやいています。

クリスマスはまたいそがしいときでもありません。最初のクリスマスも野原にいるひつじかいたちにとってはいそがしいものでした。天のか



絵：ジェリー・ハーストン

がやきを見て、ひつじかいたちは天使からすばらしいおさな子が生まれたという知らせを受けるとすぐ、急いでおさな子を見に行きました。メキシコの村では、子どもたちが最初のクリスマスのように^{えん}演じます。ひとりの子どもがマリヤになり、もうひとりがヨセフになります。そしてふたりは村の家々を宿屋のつもりでたずねます。ほとんどの宿屋（家）の人々は子どもたちをおいかえますが、最後にやさしい人々が休み場所をあたえます。

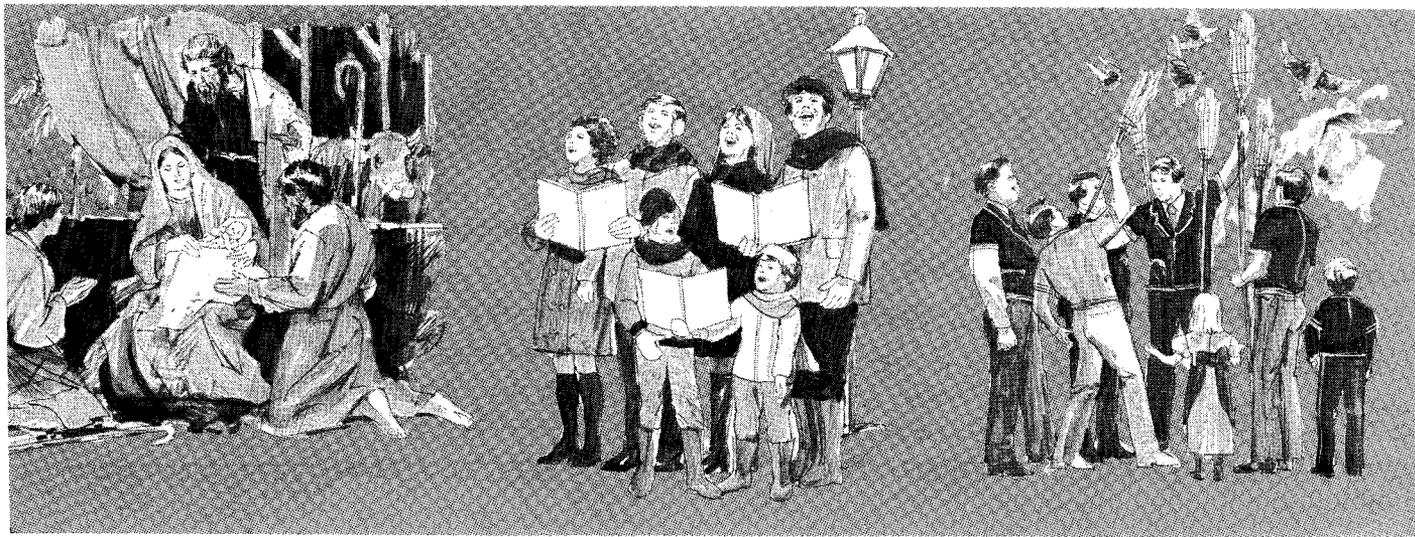
クリスマスは愛の季節です。おたがいにプレゼントをおくることによって、この愛をあらわします。スカンジナビアの国々では、小鳥たちのために^{ぼう}棒に^{こくもつ}穀物の^{たば}束をつけて畑や家畜小屋の屋根におきます。この季節には、世界中の人々の心が友だちや隣人^{りんじん}への愛でいっぱいになるようです。

ずっとむかし、あの聖夜にイエスがお生まれになったとき、天のお父さまの愛が地上の人々

に豊かにそそがれました。天のお父さまは、いつの日か私たちがみな天の家へ帰ることができるように、すべてのおくり物の中でもっともすばらしい、天のお父さまの愛するひとり子を送ってくださいました。天のお父さまへの愛をあらわすことのできる最良の方法は、天のお父さまの教えや戒め^{いまし}に従うことです。天のお父さまは、このように言うておられます。「^{なんじ}汝らのうち^{われ}我を愛する者はわが戒めを守るべし。」

1年のうちのこのとくべつな季節に、みなさんがクリスマスのあかりを見、クリスマスソングを歌い、せわしさを感じるこのときに、イエスを思い起こしてクリスマスの喜びを味わうことができますように。また心に愛を満たし、まわりの人々によい思いをもって接することができますように。

みなさんが天のお父さまと御子イエスのすばらしい愛を感じるとともに、私たちの愛をも感じとってくださるようにお祈りしています。



質 疑 応 答

ここで与えられている解答は、解決の一助となるものであり教会の教義として公式に宣言するものではない。

「グラナイト・マウンテンの記録保管庫 はどんな働きをしていますか」



解答／バートン長老

いつ起きるともわからない暴動の最中に、あるいは何かの腹いせのために火炎びんが記録保管庫に投げられたとしたらかけがえのない貴重な記録を失ってしまうでしょう。またハリケーンが破壊的な勢いで大陸の沿岸地方をおそい、台風が島全体に押し寄せてくるかもしれません。あるいはまた、漏電のために何百年の間大切に保管されてきた記録を灰にしてしまうかもしれません。また、バンダル族のような野蛮人が教会ごと強奪し、貴重な書類を所かまわずまき散らし、風雨にさらしておくかもしれません。政治活動家がひき起こす暴動や反乱が、町の一角にある図書館の大切な書籍類を燃やす結果にならないとも限りません。さらに恐ろしいのは、人類のどの時代にもあった破壊的とも言える戦争です。

人間は長い間、原本、歴史、伝記その他系図記録など世界中の大切な記録を安全に保管することに頭を悩ませてきました。これらの書類を天災や時の経過で生じる荒廃、人間の破壊力からどこでどのように守ることができるでしょうか。

マイクロフィルムを使って世界中いたる所で原本の写しが作成されています。その結果、現在非常に多くの記録の写しが安全にしかも確実に保管されるようになりました。教会の系図協会は今まで見られなかったほど広範で有効な系図プログラムに取り組んできています。マイクロフィルムは、数百万ドルを要するこの系図プログラムの中心となっており、マイクロフィルム撮影者は、毎日世界各地で記録を写しています。土地譲渡証書、証文、遺言書、婚姻や埋葬記録、教区記録その他系図にとって価値があることがわかっている記録などがフィルムにおさめられています。現在までに75万本以上のマイクロフィルムが積まれており、毎日数千本の新しいフィルムがそれに加えられています。現在マイクロフィルムにおさめられている記録を本にすると1冊300ページで300万冊以上にもなります。

長く残すためには、マイクロフィルムの写しを自然や人間の手の届かない安全な場所に保管しなければなりません。教会は、北アメリカの西部、険しいロッキー山脈の中腹にそのような保管庫を設けましたが、そこは春の融雪洪水から守られるように峡谷の底部からはるか上方にあり、数百メートルのみかげ石で上部を守られています。そこは、現在何百万本という貴重な記録がマイクロフィルムを安全に保管する所となっています。

グラナイト・マウンテンの記録保管庫の内部防護設備の完璧さは、外形からはとうてい推しはかれませんが、研究室や事務室の上には100メートル近い固いみかげ石が、また6つの巨大な記録保管室には200メートル以上のみかげ石が連なっています。保管室一帯には非常にがんじょうな、銀行の金庫室を思わせる扉のついたトンネルが3つほどあり、そこから出入りします。中央のトンネルの大きな扉は14トン以上もあり、東西のトンネルについている小さな扉でも9トンがあります。

このマイクロフィルムプログラムは、教会員が先祖の探求に必要な記録を入手できるようにとの意図で、1938年に始められたものです。このプログラムは教会の記録係としての役割を年ごとに拡大しつつあり、市や郡、州の博物館でもこの事業に注目し、その価値を認めています。要請に応じまたは計画されたスケジュールに従って、系図協会では博物館に対し記録を無料でマイクロフィルムにおさめています。そしてでき上がったマイクロフィルムの写しは、記録提供のしるしとして、普通、博物館に寄贈されます。

教会が望み、目的とするところは、何代にもわたって記録されてきた世界中の系図資料を集め、自然や人間の破壊力が

ら安全な所に保管することです。世界中の博物館や記録保管所でカメラがパチリと音をたてるとき、この価値ある目的が実現されつつあるのです。この立派な複雑な機械が動き、これらの記録は効果的かつ事務的な方法で1ページ1ページ、1冊1冊貴重な宝として保管され、山々に囲まれた場所で安全に守られているのです。

十二使徒評議員補助
セオドア・M・バートン

「キリストが再降臨される時、人々は主に会うため『空中にあげられる』というのは、エノクの民のように実際に地上から引き上げられるのですか。」



解答／スペリー兄弟

この質問に対する答えは「然り」です。聖句を2, 3引用して説明しましょう。主の再降臨に関して記している教義と聖約の次の言葉に注目して下さい。

「而して、生きて地上に在る聖徒らは、その身変りて主に会うために空中に挙げられん。」(教義と聖約88：96)

また教義と聖約27章18節にはこう記されています。

「……わが来るまで忠信なれ。さらば汝は引き上げられ、わが在るところに汝もまた在らん。」

聖句のもうひとつの箇所では、ある点でもっとはっきりしています。救い主の再降臨に関して、使徒パウロはこのように述べています。

「すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、

それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。」(Iテサロニケ4：16, 17)

このように、再降臨のとき主に会うために、文字通り「引き上げられる」人々がいるということは明らかですが、教会の名簿にのっているすべての人々がこの祝福された特権にあずかるわけではありません。星の光栄の世界を受け継ぐ人々でさえ「すべて聖徒らと共に集められず、従って高く挙げられて『長子』の教会に入れられ雲の中に迎えられざる者共なり」(教義と聖約76：102)というように、教会員の多くが「引き上げられ」ないというのが私の意見であり、それは次の理由によるものです。最初にこの聖句を読んで下さい。

「わが栄光をもて来るその日に、十人の処女につきてわが語りしたとえは成就すべし。

賢くして真理を受け入れ聖霊の導きに従い騙されざりし者は、誠にわれ汝らに告ぐ、彼らは伐られて火に投げ入れらることなくその日に堪うるべし。」(教義と聖約45：56, 57)

「……人の子の来る日に……」

その時までは、賢き者たちの中に愚なる処女たちあるべし。而して、その時悪しき者と正しき者とは全く分たる。」(教義と聖約63：53, 54)

十人の処女のたとえ(マタイ25章)から明らかなように、花むこが来るときに教会の名簿にのっている会員の多くはランプに全然(あるいはほんの少ししか)油を持っていず、彼らは主に会うために引き上げられるほど、霊が良い状態にはないのです。

最後に、主がこのように言われていることに心を留めなければなりません。長子の教会員(教義と聖約76：54)は、「イエスがこの世に於てその民を治めんために天の雲に乗りて来りたもう時、彼に連れられて共に来らん。」(教義と聖約76：63) これらのことから、地上の聖徒のうち最も霊的かつ正しい人のみが天にあげられ、長子の教会員として地上に戻って来るにふさわしいとするのが妥当ではないでしょうか。実際、長子の教会員になれるように永遠の生命に定められた聖徒は比較的少数です。しかしながら主と交わした誓約を今守っており、このまま最後まで忠実であれば長子の教会員になれるという人々は多くいます。主は相当数の人々が主とまみえるために高くあげられるようにして下さいに違いありませんが、この点については、完全には知らされていません。

シドニー・B・スペリー
ブリガム・ヤング大学

「旧約聖書の言語と文学」名誉教授

タヒチ島の 什分の一

十二使徒評議員会会員
マシュー・カウリー

最近訪れたタヒチ島の南では、教会員が真珠採りの季節労働をしている。彼らはフランス領オセアニア諸島切っの真珠採りである。なぜだろうか。それは、彼らが知恵の言葉を守っているために、守らない人たちよりも長時間水にもぐってられるからである。2分40秒以上もの間、30メートルの深さでの潜水作業をやっている。そして、来シーズンまでの生計を支える真珠貝を採るのである。

ここにある若い末日聖徒がいて、浜辺にふた山の真珠貝を並べていた。ひと山は大きく、もうひと山はそれより小さかった。売買契約をした買い手が来て、彼に小さい山のことを尋ねた。「それは君のかい？」すると青年は、「いえ、違います」と答えた。

買い手は言った。「どこから持ってきたのだい？」

「もぐって採ってきたんです。」

「じゃ、どうして君のじゃないの？」

彼は答えた。「神さまの真珠貝です。」

「だれに言えば買えるんだい？」

「ぼくです。」

「そうか、じゃ、買った。」

「ええ、売りましょう。でも契約した値段じゃありません。神さまの真珠貝ですから市価で買っていただきます。」市価は、契約したあとから値上がりしているのだった。

彼はそうして神さまの真珠貝を市価で売り、自分の真珠貝は契約値段で売った。私が彼に、もし市価が上がらずに下がっていたらどうするはずだったかと聞くと、彼はこのように答えた。「……売らないでとっておいたでしょう。神さまの真珠貝はいつも最高の値段で売ることになっているんです。」

「インブルームメント・エラ」〔英文〕1948年11月、第51巻 P. 756



マシュー・カウリー長老は、1897年8月2日、合衆国アイダホ州プレントンで生まれた。わずか17歳でニュージーランドで伝道するように召され、その後1938年に、ニュージーランド伝道部の伝道部長に召された。

1945年10月11日、ジョージ・アルバート・スミス大管長により十二使徒に聖任され、十二使徒評議員会会員に任命された。カウリー長老は、教会幹部として3年間太平洋諸島の各伝道部を管理した。彼はすばらしい言語の賜を持ち、奉仕する数多くの国々の言葉を話すことができた。1953年に死去するまで、太平洋諸島、東洋、その他多くの伝道部、ステーク部を広範囲にわたって訪問した。

神権者に寄せられる新たな召しと責任

教会指導者に従いなさい

ハロルド・B・リー大管長

私はある人から手紙を受け取った。彼は象形文字から、人類の前途に横たわる数々の物事への答えとなる発見をしたと思われている。手紙を読んだ私は非常に興味をそそられ、1931年10月4日にこの壇上でアンソニー・W・アイビンズ副管長が行なった説教のことを思い出した。なぜそれを思い浮かべたかは、彼がその大会の壇上で、最近出版された「石に刻まれた聖書」

(Our Bible in Stone)を引きあいに出して説教されたからである。あなたがたの多くはそのとき話されたギゼやギリシャやキオプスのピラミッドの、主としてその建造物、象徴、予言的特徴についての話を覚えておられるであろう。ピラミッド学者たちはピラミッドの測量や象徴、現存した場合にはその記録を研究したあとで声明を出した。それは、1928年は一大苦難の時代



の初まりとなり、1936年に絶頂に達するであろうというものであった。学者たちの計算によると、この時代は主の再臨で終りを告げ、平和と幸福と善意の時代が到来するというのであった。

そのときアイビンズ副管長は、この本に関して次のような賢明な勧告を与えた。「さて、愛する兄弟たち、……私はこの小さな本とその内容についてあなたがたに理解してもらいたいと思

う気持から話している。この本が伝道でも読まれることは確かで、長老たちはこの本を使うかもしれない。私はただあなたがたに、センセーションは絶対に招かぬようにと警告する。……彼の結論が悪いとは言わない。しかしそれは教会の声として私たちに与えられたものではなく、そのように受け入れることのできるものでもないと言うのである。」

そして彼は、私には非常に意味深いと思われることを述べた。「J・ゴルドン・キンボール兄弟は昨日私たちに、自分は夢が実現すると固く信じていると語った。」このことについて考えていただきたいと思う。それは私の気持と一致する。私も夢は実現していると固く信じている。

彼は言った。「世界大戦終結後すぐにそれらのピラミッド学者たちが、彼

らの測量と計算によれば1928年に世界中の国民に苦難と悲嘆をもたらす時代が始まるという発表をし、出版もしたことを思い出す。人々は主の前にへりくだらなくてはならないことや、この艱難の時代が1936年まで続くことも宣言された。……私たちは少なくともこの夢の一部が実現したことを知っている。」

アイビズ副管長は1930年当時の世界各国の経済状態を論評した後、知恵ある言葉で評言をしめくくった。「では兄弟姉妹、どうお考えだろうか。ただ落ちて主に向心を向けなさい。……私はこの民に、自分の家を整え、負債を避けるようにとお願いした。なぜなら私はそのようなことが起きると知っていたからである。それは神御自身が独り子を通して言われたことだからである。」

さて、兄弟姉妹、教会があなたがたに言うことがもしあるとすれば、それは直接に教会からであって、他の人々の書物を通して言われるのではない。それは、あなたがたに理解できるような方法で伝えられる。思わくや思弁ではない。理性的に、真実ありのままに常識で納得の行くように伝えられるであろう。神があなたがたを祝福されるよう、へりくだり祈るものである…。」
〔「大会報告」1931年10月、〔英文〕P

87—94)

さてこれは、神権者全員に繰り返す必要のあることである。なぜならば、忠実な教会員であると主張するある人々が盛んに書物を出して、広告やはしがきやエピソードの中でかなりの細部にわたり、自分の過去、現在の教会への加入や活動ぶりを述べているからである。それにはセンセーショナルな予言や発言が見られる。彼らは、確実な筋からの本として教会員に買わせたいために、その本の保証であるかのようなやり方で、過去現在の教会指導者の説教や引用文をひきあいに出す。そうすると教会の承認を受けた書物らしく見えるからである。

さてまた、教会には、忠実な教会員であると言って大会に集まる聖徒たちを利用する人々がいる。彼らは自分たちのためにグループ集会の計画までする。非常に大切な大会や教育部会の欠席を余儀なくしてまでも、大勢の大会訪問者を自分たちの集会に出させようとする意図が明白である。

さらに、一計を持つ人々がファイヤサイドや神権定員会や聖餐会その他の教会の集会に話の機会を願い出ている。さて兄弟たち、私たちは、自分の利益をはかり主張を広めるための明らかにそれとわかる彼らの策略から、私たちの民を守るために警告の声をあげ

なければならないことをひしひしと感じている。

私たちは、神権指導者が確かな思慮分別をもって、動機が重大問題となりそうな人々をふるい分けるようにと勧めなくてはならない。

さて、神権の召しを遂行することについてひと言述べてみたいと思う。このことについては、今夕、多くを語られた。私は1830年に予言者ジョセフ・スミスを通してエドワード・パートリッジに与えられた短い啓示から、一部を読みたいと思う。

「イスラエルのいと大いなる神、主なる神、わが僕なるエドワード・パートリッジにかくの如く告ぐ。見よ汝は幸福なり。而して汝の罪は赦されたれば、高鳴るラッパの如き声をもてわが福音を宣ぶるために汝は召されたり。われ、わが僕なるシドニー・リグドンの手によりてわが手を汝の頭の上に按かん。さらば汝はこれによりてわが『みたま』、聖霊、すなわち王国に属ける平和なることを教うる『慰め主』を受けん。

われ今すべての人々に就きて、この召と誠命とを汝に与う。すなわちこの召と誠命とを奉じて、わが僕シドニー・リグドンとジョセフ・スミス（二代目）の前に来る者は、みな聖職の按手任命を受けて諸々の国民の中に永遠の

福音を宣べんために遣わさるべし。

われまたわが教会の長老たちにこの誠命を与う。すなわち真心を以てこの誠命を奉ずる者は、ことごとく正にわが今語りし如く聖職の按手任命を受けて、福音を宣ぶるために出で行くを得ん。われは、神の子イエス・キリストなり。この故に、汝ら腰をひきからげよ。さらば、われにわかになが神殿に来らん。……」(教義と聖約36:1, 2, 4, 5, 7, 8)

ここで私はこの中のひとつの聖句を取り上げて、神権の召しを遂行することについて少々話したい。主のこの言葉に注意してみなさい。「われ、わが僕なるシドニー・リグドンの手によりてわが手を汝(エドワード・パートリッジ)の頭の上に按かん。さらば汝はこれによりわが『みたま』、聖霊、すなわち王国に属ける平和なることを教うる『慰め主』を受けん。」

先日の夜、私は執事に聖任される年頃の若いカブスカウトたちのグループと会い、こう尋ねた。「執事になったら、どんな義務があるでしょうか。」

すると彼らは全員で答えた。「執事の義務は聖餐のパスです。」

私は言った。「では、そのことを少し違ったふうに考えてほしいと思います。それは執事の義務を説明する方法ではありません。聖餐のパスを行なう

ことは、どういうことですか。執事が出席者のために祝福された記念のパンと水を配るとき、誓約が新たにされてもし彼らが神様の戒めを守り、パンと水の記念の対象である主イエス・キリストを心に覚えたならば、主のみたまが共にいるのです。」

執事には、主を代表して記念のしるしを配る責任があり、そのようにして彼らは主の使いとなるのである。

教師にその義務を尋ねると、「ホーム・ティーチングです」という答えが返ってくるかもしれない。ではこう言ってみたらどうだろう。「ホーム・ティーチングを行なうとき、あなたは主を代表して教会員の家庭を訪問し、その人たちが自分の義務を果たしているのを見とどけ、みんなが神様の戒めを守っていることを確認するのです。」

祭司の義務は「説き、教え、釈き、勧め、バプテスマを施し、聖餐式を執り行うべきことなり。また各会員の家族を訪れ、彼らが声を挙げてみひそかにても祈りをなし、またすべて家庭の務めにいそしむように勧め」(教義と聖約20:46, 47)彼らがこれらの務めに働くときは、主のために働いているのだということを心に留めるべきである。

私たちが神権者として主の御名によ

り働くとき、それは天父なる神の御名のもとに天父を代表して働くことである。神権とは、天父が人間を通して、執事を通して、教師を通して、祭司を通して働かれる力である。そのことを私たちは教会の青少年にはっきり印象づけていないように感じるのである。若人は自分の神権の重要さを、その通りに理解していない。もし理解していたならば、タナー副管長がフェーズストーン監督について語ったようにしたいと、いつも思うはずである。彼らは、神権を行使するときには最高の姿でありたいといつも思う。髪にはきちんと櫛目を入れ、衣服や外見は、神権の義務を執り行なうにふさわしい、神聖さを反映するものにした。私もそれと同じ気持を持っている。私はこれまで、例えば病人のいやしのような儀式を、例え庭などの外に出ていたときでも、中座して一番良く見えるように衣服を整えたあとでなければ執行しなかった。なぜならば、そうすることによって主御自身に近くなった気持がしたからである。私は、主の御前では最高の服装をしたいと思う。

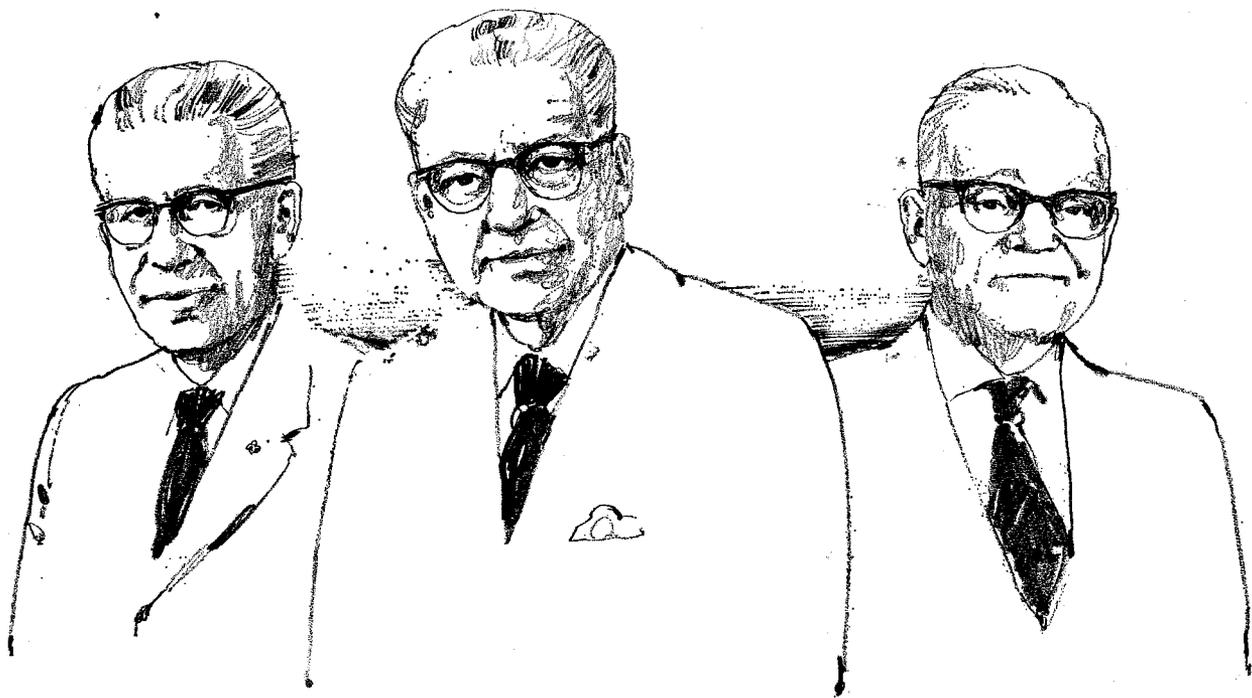
兄弟たち、私は長老のある人々がこのことを理解していないのではないかと憂慮している。すなわち、彼らが教会の長老として、あるいは七十人、大祭司として職務を執行しているとき、

儀式の執行には、主が彼らを通して儀式を施される者の頭に力を及ぼしておられるということ。私は時々考えるのだが、私たちが神権の召しを遂行していない理由のひとつは、神権者として、主が聖なる神権の力により私たちを通して働いておられることを理解していないことである。私は、私たち全員がこの気持を持って、教会の若人に神権を持つということの意味と神権を

重んじることの意味を教えるよう願っている。

さて兄弟たち、私たちは今晚数々の事柄に触れた。私たちは今回、神権者の出席がこれまでの最高を数えたと見ている。影響はいかに大きいことであろうか。この大会において、あなたがたは私たちの社会生活に見られる最も危険な傾向の幾つかに、すなわち性教育やポルノグラフィやそれらを認可

するという現代社会を風靡する傾向について注意を呼び覚まされた。神権を持つ兄弟たち、この主の軍勢が、もし影響力のすべてを身によろい、天父の代表者として神権の召しに奮起邁進したならば、力が生ずるであろう。そしてその力は、各社会で私たちが神権を行使することにより、生ける神の神権者の側にあって、必ずや頑強な防御となることであろう。



「教会があなたがたに言うことがもしあるとすれば、それは直接に教会からであって、他の人々の書物から言われるのではない。」

——アンソニー・W・アイビンズ副管長

私たちは今や新たな召しと新たな責任に専念しなければならぬ。怠惰に傍観し、これらの物事に挑戦せずに見逃してはならない。教会の若人は危険に囲まれている。あなたがたの家庭の絆を強くしなさい、兄弟たちよ。私たちがこれまで述べてきたように、私が何回となく繰り返すように、またこの大会でも何人かが話したように、「あなたがたが兄弟たちが父親としてできる最大の主のみわざは、あなたがたの家庭の囲いの中にある」ことをしっかり心に留めなさい。兄弟たちよ、妻をないがしろにしてはならない。子供たちをおろそかにしてはならない。家庭の夕べの時間を取りなさい。子供たちをまわりに集めなさい。彼らを教え、彼らを導き、彼らを守りなさい。家庭に一致と力がかくも必要な時代はかつてなかった。もし私たちがこれを実行するならば、教会の力と影響力は世界中で飛躍的に増進するであろう。あなたがたは、もはや物笑いやあざけりの種に見られることはない。私たちが、誉れあること、正しいこと、純粋なこと、徳あること、真実なことのために、確固として、立ち上がらなくてはならない。

神権を持つ兄弟たちよ、私たちはあなたがたを愛している。私たちの用意はすでに整った。あなたがたが私たち

のために祈るとき、私たちは神を援助者に迎えて高い期待に添おうと努力しよう。私たちが自分の持つ責任の重要性を理解している。あなたがたの信仰

「家庭に一致と力がかくも必要な時代はかつてなかった。」

と忠実さと、たじろがずに神の戒めを100パーセント守ることを確信できないければ、そのつとめに応えることができないのである。

私は今大会の最初に、ある学生自治会長からのすばらしい手紙を披露した。彼は大学のキャンパスや自分の属する社会に起こりつつある状況に大きな関心を寄せ、このように述べている。「この大学に籍を置く末日聖徒の学生で、戒めを守っている者は皆、大管長を完全に支持しています」と。兄弟たち、私はこのことが全教会にわたってその通りであると知っている。戒めを守るすべての末日聖徒は、教会の指導者に従う。この証拠により、もし教会の指導者に喜んで従わない人があるなら、あなたは彼らが神の戒めを100パーセント守っていないことを確信できるであろう。

これは武装命令である。何のための武装であろうか。それは、今大会でも幾人かが話し、教会の若人も感じとっているようなこの動揺の時代、狂気の混乱した世の中であって、私たちがどうしても受けなければならない祝福を要求できるように、神の戒めを守るためである。教会の若人の新たな動きに伴い、私たちがただひとつ希望することは、神権の責任を若人の組織に強調して彼らの手を強くすること、すなわち神権の守護を多く必要とする、これら青年男女に手を差し伸べることである。なぜならば、そうすることにより未来の世に御業を推進する正しい世代の育成の一翼を担っているという確信が得られるからである。

愛する兄弟たちよ、私は今晚語られた事柄が主に靈感を受けて語られたことを厳粛に証申しあげる。そしてこのことをあなたがたが熟考し、祈りをもって思いはかるよう、批判を慎み、非難の声をあげないようにと申しあげる。私は今晚あなたがたにこれを証し私の祝福を与え、神の祝福がシオンの力、地上の神の王国の背骨、教会の神権者たるあなたがたの上にあるよう願うものである。祝福があなたがたの上にあらんことを。イエス・キリストの御名により。アーメン。

神権者の責任は福音の原則を固守することによって全うされる

神 権 者 の 責 任

第一副管長

N・エルドン・タナー

私たちが神権の意味を本当に理解しているのだろうかと考えることが私にはよくある。非常に主に近い人であるロムニー副管長が、今晚いくつかの指示を与えられた。私たちがそれを守るならば、神権についてよく理解でき、神権の召しを一生懸命に果たす人々の受ける祝福を自分も受けることができるであろう。今晚の私の話も神権の召しを全力を尽くして遂行することについてのものである。ロムニー副管長の話と全く同じで、あなたがたの持つ神権の職を全身全霊をもって全うするようにと申し上げたい。なぜならば、兄弟たちよ、それこそが私たちのなすべきことだからである。神の神権を授かるときに、この重大な責任を課せられるのである。

私は神権について考えるたびに、天父の御名によって語り、行動するすばらしい名誉と特権、およびそのための自分の責任のことを思う。私はよく、「神権を身に受けた私たちは何をしようとしているのだろうか。私たちは自分が何者で、何を持っていて、どんな責任があるのかを自覚しているだろうか」と言う。

私はあなたがた青年に申し上げたい。



楽しみなさい。バスケットボールをして、フットボールをして、テニスをして、したいことは何でも楽しみなさい。正しいことである限りしたいことは何でもしなさい。しかしどこにいても、あなたの神権を尊んで、世の模範となりなさい。

次に、神権者である私たちがいかに生活すべきかという問題について、簡単にお話したい。まず家族について少しお話したいと思う。父親は、自分の生活にとって家族が一番大切なことを常に心得ていなくてはならない。決して家族をないがしろにしてはならない。家族に心を配るとき、現在と永遠にわたって家族と共に過ごしたければ福音の教えに従って生活しなければな

らないことを忘れないように。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない」という言葉を心に留めるべきである。また、一番印象に残る教えを学ぶのも、子供の一生が決まるのも家庭であることを忘れてはならない。

もし父親が神を愛し、妻を愛し、子供たちを愛し、神権を尊ぶならば、わずらいはほとんどないであろう。全世界の神権者がそうしたならば、いかに大きな影響力を持つことであろうか。

「少女や母親、婦人たちは、どうなのか」と言う人があろう。彼女たちについても同じである。しかし今私は神権者に、そのとるべき行動について話しているのである。

安息日を聖くしなさい。知恵の言葉を堅く守りなさい。常に祈り、互いにまた隣人に正直でありなさい。福音を学びなさい。自分に何が期待されているのか、なぜこの世にいるのかを知りまた私たちが実際に神の霊の子であることを知りなさい。それがゆえに私たちは自分を道徳的に清く保たなくてはならないのである。父親たちよ、私たちは少年にこのことを教えなくてはならない。

デビッド・O・マッケイ大管長につ

いてのマッケイ姉妹の言葉を、家族と父親に関する模範として紹介したい。

「私は夫をととても誇りに思います。家庭での夫は、ほかの場所にいるときと少しも変わりません。やさしく、礼儀正しく、親切で、丁寧に、すばらしいのです。そのような夫を私は心から誇りに思っています。私はこのような夫に対し、感謝しています。私は夫に悪い点を見つけることができません。私は、兄弟たちが振舞いや姿、形において彼の模範に従うよう願っています。」

兄弟たちよ、私たちにとってこれにまさる助言はないと思う。

私は良い教えの例として、かつて自分の両親のことを話してくれた少年のことを思い出す。彼は、神殿に行くこと、また定期的に神殿へ行って、主の家に入るにふさわしい状態を保つことがどんなに大切かを両親から学んだと話してくれた。神殿へ行く準備をしながら、彼らは神殿や神殿での経験についてよく話をした。神殿へ行くこと、しかも定期的に行くことがいかに大きな特権であったらうか。神殿から帰って来ると、彼らはそこで得た経験についていろいろ話し合ったそうである。神殿結婚をした人たちを「ああ、あのふたりはこれから神の霊の子供たちの両親になれるんだなあ」と思いながらながめたときのあのすばらしい気持、そして、自分たちにとって神殿に入ることがかけがえのない特権であることについて。その少年は神殿に入って自分のエンダウメントを受けられる日を待ちかねており、身を清く保って自分を備え、主が受け入れて下さるという自覚を持って神殿に行くことがいかに

大切であるかをよく知っていた。

私事であるが、いつも感じている父への感謝を申し述べたい。父は私たちに祈ることを教えてくれた。父がひざまずいて家族の祈りをするときは、じかに主に話をしているようであった。父はひそかにひとりで祈ることを教え

てくれた。父はあらゆる行動に正直で名誉を尊んだ。父が隣人に対して正直で高潔な人であると感銘を受けた経験を、時間をいただいて話させていただけたらと思う。父は神権をよく行使し私たちにもそうすることを期待した。父はいつも母に大きな愛を示していた。

「息子に高い目標を定めさせ、その達成に努めさせることは実に大切である。」



私たちは農場でよく仕事をしたが、それに劣らず狩猟や魚釣りにもよく連れて行ってくれた。出かけるのが困難だと思えるようなときにも、父は一緒に出かけた。しかし日曜日に出かけることは決してしない人で、そのようなことは考えもしない人だった。私たちはいつも決まって父と一緒に集会に出席した。私は友達からあるときこのように言われたことがある。「ぼくのお父さんも君のお父さんのようだったらな。君のお父さんと一緒にいられるって、とっても素晴らしいことだね」と。私たち兄弟4人は皆、だれよりも父と一緒にいることを好んだ。それほど良い父であった。父親の皆様、自分の生活を息子に知ってもらい、また息子の生活を知るために、一緒に過ごすことがどんなに大切であろうか。

私は、父が私に寄せてくれた信頼を忘れることができない。先程述べたように、私たちは農場で働いていたが、父は夕方か早朝に私を呼んで自分の計画や一日のスケジュールを話し、私の考えを聞いた。これをした方がよいだろうか、それともこちらがよいだろうか。そのために、私は自分も父と一緒に働いていると感じた。今にして思えば、父は自分でかなり綿密な計画を立てていたのだが、そのようにして私に信頼を示してくれたのだと思う。私は自分の仕事だという気持ちがして、くじけずに終りまで働いた。そしてそのような父を愛した。

父がある日このように言ったことを覚えている。「私はどんな人を雇うよりもおまえに手伝ってほしいと思うよ。おまえを心から信頼しているんだ。お

まえは本当によく働いてくれるね。」このように信頼され、感謝されれば、期待にたがわず働こうとさらに決意を強くするものである。

息子に高い目標を定めさせ、その達成に努めさせることは、実に大切である。私たちは、今晚重ねて言われたように、サタンが現に存在して、私たちを滅ぼし、失望させ、試み、迷わせようと決意していることを知らねばならない。

私がかつて非常に感銘を受けたすばらしい出来事をここで話したい。フェザーストーン副監督の許しをいただいてその話をしよう。それは彼の家族が、友だちが大勢いて住みなれた故郷から、この地に引越して来てすぐの出来事であった。フェザーストーン副監督が仕事から帰ってふだん着に着替えてくつろいでいると、下の息子さんのジョー君がやって来て言った。「お父さん、この生活に慣れて楽しくなるようにぼくに特別な祝福をしてほしいんだけど。」

副監督は2階に行って服を着替えてきた。その途中で奥さんが声をかけた。「今晚は外出なさらないはずでしょう。」彼は答えた。「ある人に祝福をするんだよ。」そしてこう言った。「ジョーから特別な祝福を頼まれた。服を着替えて、神権を尊ぶ気持ちとジョーへの関心を伝えるんだよ。こうすればジョーは私と神権に対して信頼を抱いてくれる。そうすれば、祝福が受けられるだろうからね。」

兄弟たちよ、これが私たちの持つべき精神である。もちろん、監督が奥さんに語った通り、そのあと何が起きたかは想像がつくであろう。自ら模範と

なり、子供に関心を持ち、神権者として主を代表する時の心がまえを子供に教えた父親、そのような夫を持った喜びを夫人は涙をもってかみしめたのであった。

私は監督、およびステーク部長を含むワード部、ステーク部の役員および伝道部長に一言申し上げたい。私たちには重い責任がある。特に監督は、副監督と共にアロン神権者に対する責任を受けている。このことについては今晚多くのことが言われたが、私もほんの一言申し上げたい。皆様方はすべての少年の名前を知ってはいくなくてはならない。ひとりひとりに関心を示し、密接なつながりを保ちなさい。名前がわかかったら、名前前で呼びなさい。父なる神と御子イエス・キリストがジョセフに現われたもうたときのことを思い出してみなさい。ジョセフが質問をする時、神は「ジョセフ」と名前を呼び、「こはわが愛子なり」と言われたのである。(ジョセフ・スミス2:17参照)少年は自分の名前を呼ばれるとうれしいものである。

神権者として職務を果たすときには主を代表していることを知って、主の代表者にふさわしい服装と用意と謙遜さ、敬虔さを持つべきである。

監督の皆さん、少年たちに神権の意味を理解させることは重要なことである。私がかつて監督であったとき、ワード部には長老に聖任される年齢の若者が6人いた。しかしそのうちのひとりには用意ができていなかったため、5人しか推薦できなかった。私は彼とそのことで何回も話し合ったが、彼は私に、「自分には資格がありません」と

言っていた。彼は非常に気分を害していたが、ステーキ部長への推薦がもらえとは期待していなかった。彼の叔父にあたる人が私の所へやって来て言った。「まさかあなたはほかの5人がもらうというのに、あの子ばかりを引きとめようとはなさらないでしょうね。」彼はその若者を推薦するように私に頼んだ。彼は「推薦しなければ、あの子を教会から追い出すこととなります」とも言った。

そこで私は彼に説明した。「私が彼に与えられるもので一番大切なのが神権です。私たちは神権を銀のお盆の上でやりとりなどはしません。彼と私とはお互いに理解し合っています。彼は長老に聖任される用意ができていないのです。」その若者はやはり推薦を受けなかった。

数年前、このテンプルスクエアで開かれた総大会に出席したとき、ひとりの若者が私の所へ来た。「タナー副管長、私を覚えておられますか。長老に推薦されなかった、あのときの少年です。」彼は手を差し伸べながら言った。「あなたにお礼を言いたいと思っていました。私は今カリフォルニアで監督をしています。もしふさわしくないのに推薦を受けていたら、私はきっと神権の意味や神権者に求められていることを理解できなくて、今のように監督になることもなかったでしょう。」

監督の皆さん、これらの若者たちは無償で何かを求めてはいない。彼らは無償で得たものに対しては本当の理解を持たない。彼らは神権の意味をよく理解して、昇進の前にはふさわしい準備をすべきである。

神殿の推薦や神権昇進の推薦、伝道の推薦その他何らかの資格を考慮する場合には、面接によって彼らの状態を知り、必ずふさわしい準備ができていようにしなさい。ふさわしくないのに推薦することは、実に愛情に欠ける行為である。それは大きな害となり、決して行なうべきことではない。それ自体の持つ意味と、ふさわしい準備をすることの大切さを彼らに理解させなさい。あなたが彼らを愛していること、また、自分にできることなら何でもして、彼らがふさわしくなるように手伝ってあげたいことを知らせて、励ましなさい。

監督の皆さんに申し上げたい。あなたがたはワード部の父としてワード部の諸事に関する指示を与え、将来ワード部やステーキ部の指導者となり、いつの日かこの壇上に立つ若者たちを助け導く大きな特権と大きな喜びを受けているのである。若者たちの中から、だれかがそうなることは確実である。若者たちにいつか責任ある役職を受けるかもしれないことを理解させ、準備させなさい。私は今晚このことを言わせていただきたい。神権者全員が指導者の役職に召されることは不可能である。しかし神よりの神権を持つことは大きな特権であり、大きな祝福でありもし私たちが神権を尊ぶならば、そのことだけでも救いと昇栄を受ける備えとなるのである。もしどこに召されても主に仕える用意ができていなければそれで十分である。神の神権は、世の人々が持たないものである。

監督の皆さん、あなたがたにはそのほかにも責任がある。あなたがたはイ

スラエルの判士であり、罪人を常に愛と信頼と、助けたいとの望みとをもって裁き、処する責任を遂行しなくてはならない。ステーキ部長、伝道部長もその責任を持つ。非道な行為を認めたら、大きな愛の気持を抱いて罪人に関心を示し、彼を悔改めに導くことが大切である。それが親切である。どんな人をも愛しなさい。しかし不正を容認してはならない。何か悪いことがあるようならば、事の重大さに従い、すべての違背行為を調査し、処置することはあなたがたの義務である。処置が早ければ罪を重くするのが避けられるかもしれない。

聖典と手引きを学び、その通りに行ないなさい。監督とステーキ部長はこの責任を回避してはならない。自分だれも罰しなかった、会員権の剝奪も破門もしなかった、そうしようと思ったことは一度もなかったと言う者は、まったく誤った態度を示しているであって、自分にその責任を負うことになるであろう。

主は言われた。「誰にてもキリストの教会員にして罪を犯し、または過ちに陥りたる者は聖典の指図するところに則りて処置すべし。」(教義と聖約20:80)

またジョン・テイラー大管長はこのように述べている。「そればかりか、私はある監督たちが罪人の罪を包み隠そうとしていることさえ聞いている。私は主の御名により彼らに告げる。彼らは自分の身にその罪を負い、裁きに服さなくてはならないであろう。またあなたがたに告げる。罪に不正な手ごころを加える者は、その罪を負わなく

てはならない。あなたがたのうちだれか、人と罪を共にし、その罪を是認する者があるなら、あなたはその罪を負わなくてはならない。聞いているだろうか監督、ステーキ部長、伝道部長の皆さん。神はそれをあなたがたの手に求められる。あなたがたは義の原則に私情を入れたり、人の不名誉や墮落をおおい隠す立場に置かれてはいないのである。」(「大会報告」1880年4月、〔英文〕P.78)

教会の扱う事例には、私通、姦通、同性愛、墮胎、その他の道徳律違反に限らず、乱暴や道徳的に下劣な犯罪行為、たとえば強盗、詐欺、窃盗、殺人など、また背教、教会の規則や規定に公然と反対を唱えたり故意に逆らうこと、あるいは妻子虐待、いわゆる重婚の唱道や実行、その他教会の律法や秩序を破るクリスチャンらしからぬ行動のすべてが含まれる。

罪を犯した人は、自分の罪を告白し悔い改めるまでは決して心楽しくなれない。経験からわかるのだが、愛と援助の手と正しい懲罰によりとるべき処置をとられた罪人は、皆明らかな良心をもって再出発をし、他のいかなるものをもってしてもできない進歩を遂げることができる。彼はあなたの処置に感謝するだろう。あなたが彼を助けようと努めるとき、主はあなたと悔い改めたその人を祝福される。

私は青少年神権者、特に青年に一言話したい。あなたがたは今晚、自分の責任が何であるかを知った。私はあなたがたに、身を清く保つことの重要さをよく知っていただきたいと思う。神殿の祝福や伝道、その他自分の役職に

伴ってできる事柄など、神権によってしか得られない大きな祝福を受ける準備をなさい。年をとってしようと若かろうと、神の神権を持つ者は、女性を敬い、大切にすることなく神権を尊ぶことはできない。若者は皆、必要ならば命を賭けて、女性の節操を守る備

「神権の職務を

つとめる時には、

自分が主を代表している

ことを知って、

主の代表者にふさわしい

服装と用意と

謙遜さ、敬虔さを

持つべきである。」

えをすべきである。女性に欲情を抱いたり、女性をいやしめたり、貞操を失わせるような罪の行ないを断じてしてはならない。神権を持つ若者と外出する若い女性は、彼がすべてにわたって自分を尊び、保護してくれることを知って安心するはずである。若い女性にはその権利がある。

だれでもわかるように、世の道徳は低下している。私たちは世にあるが、世のものとなってはならない。あなたの仲間が教会員であろうとなかろうと罪人であろうとなかろうと、彼らは神権を持つあなたに神権を尊ぶことを期待し、そうするあなたを尊敬するであろう。もしあなたが神権を尊ばないならば、彼らはあなたへの信頼とあなた

や教会への敬意を失うことであろう。

もし私たちが、監督や支部長、ステーキ部長、大管長、さらには主の目を見つめて、「私は最善を尽くして神権を行使しています」と言えるように毎日を生活したら、心配はいらない。

重大な罪を犯した若者は、悔い改めてふさわしくなるまで、神殿の推薦状を受けたり、伝道を期待したり、神権の昇進を願ったりしてはならない。ふさわしくなく、伝道に力を尽くさず、背罪を犯した宣教師を中途で解任したり、会員資格を剝奪したり、破門したりして帰すことほど、失望と悲しみの深いことはない。それは同僚にとって大きなショックであり、伝道前あるいは伝道中に罪を犯した宣教師を国へ送り帰すという難しい責任には、伝道部長も心を引き裂かれる思いであろう。両親は嘆き、監督やステーキ部長や身近で働いた彼を知る人々は悲しむであろう。それは主に対する侮辱であり、当の宣教師の人生に重大な影響を及ぼすであろう。

自分は何者であるかを知り、私たちがイエス・キリスト教会の神の神権を持つ、神の御名により語る権威を持った唯一の民であることを知って、ふさわしく生活するように主が助けたまわんことを。今晚この幾つかの建物に集まっている人々は、教会の神権の職を持つすべての人々を代表している。この教会の成功と進歩は、神権を持つあなたがたひとりびとりにかかっているのである。私たちが、ふさわしいことを証明できるように、イエス・キリストの御名によりへりくだってお祈り申し上げます。アーメン。

神権の召しを全力を尽くして遂行するための3つの原則

神権の召しを 全力を尽くして遂行すること

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

愛する神権を持つ兄弟たち、
私は皆様方のひとりびとりを励まし
その力があるならば、皆様方が神権の
召しを全力を尽くして遂行するよう靈
感を与えたいと願うものである。

神権に聖任されたとき、私たちは、
その召しを全力を尽くして遂行すると
主に誓約した。同時に主は、私たちが
それを行なうならば『『みたま』』によ
り聖められてその肉体再新さる、また
「……アブラハムの子孫となり、ま
た教会員にして王国の民となり神の選
民となる」、そして「わが父のもてる
すべて」が与えられると私たちに誓約
された。(教義と聖約84：33-38参照)

自分の立てた誓約を破り、「ことごとくにこれに違背する者」への罰は、「この世に於ても未来の世に於ても罪の赦しを受くることなかるべし」ということである。(教義と聖約84：41)

さらに主は、その場に集まった兄弟たちに次の誓約を啓示された。

「われ今汝らに一つの誠命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。そは、汝ら神の口より出るすべての言



によりて生くべければなり。」(教義と聖約84：43, 44)

私たちが神権の召しを全力を尽くして遂行するには、少なくとも3つのことが必要である。

ひとつは実行の動機となる望みを持つこと。もうひとつは永遠の生命の言葉を探し、深く考えること。

第三番目は祈ることである。

聖典は、人はその望みに応じて主から与えられると繰り返し教えている。アルマは述べた。

「……人が死を願うのにも生を願うのにも神はこれに応じたまい、人の心が救いを求めるのも亡びを求めるのも

神はこれを許したもうと言うことを知っている……。」(アルマ29：4)

イエスはこの原則に則って行動された。ヨハネは羊皮紙の記録の中でこう書いている。

「かくて主、われに言いたもう。わが愛する者ヨハネよ、汝何を願うか。……而してわれ神に申して曰く、主よわれに死に打ち勝つ力を与えたまえ。かくてわれ生きて人々を汝に導かん、と。主、われに言いたもう。誠にまことにわれ汝に告ぐ、汝このことをわれに願いしにより汝をしてわれわが栄光を以て来るまでこの世に留まり、もろもろの国民、もろもろの血族、もろもろの国語の民および世の人々の前に予言せしむ、と。」(教義と聖約7：1-3)

この最後の神権時代の幕あけに、主は予言者の父に言われた。「……汝らもし神に仕えんと望むならば、汝ら神の業に召さるるなり。」(教義と聖約4：3)

またその2カ月後に、ジョセフ・ミスとオリバー・カウドリにこう語っておられる。「……汝らわれに願うが

如く、正に汝らに成るべし。……」(教義と聖約6:8)

望みの大切なことは、教義と聖約18章の次の聖句に、劇的に述べられている。

「さて見よ、汝らのほかにまたわが福音を異邦人とユダヤ人との両方に宣べ伝えるために召さるる者あり。然り、すなわち十二人あり。而してこの『十二人』はすなわちわが弟子たるべき者にして、彼らはわが名をその身に引き受けん。誠に、この『十二人』こそ誠心誠意わが名をその身に引き受けんと願う者たちなり。彼らもし誠心誠意わが名をその身に引き受けんと願わば、……召さるるなり。

さて見よ、オリバー・カウドリおよびデビッド・ホイットマーよ。われ汝らに命ず。わが語れることを為さんと願う『十二人』を尋ね出すべし。而して、彼らはその願いと行為とによりて知らされん。」(教義と聖約18:26-28, 37, 38)

これらの人の持った願いは、役職に召されたいという願いではなかった。それは「誠心誠意」キリストの御名をわが身に引き受けたいという願いであった。

私は以前伝道部で、落胆した宣教師に何とかやる気を起こさせようとしたときのことを思い出す。私は最後に彼に聞いた。「あなたの望んでいることが何かありますか。」彼は答えた。「はい、ロムニー兄弟、私は使徒になりたいと願っています。」

だれであろうとも、教会の特定の役職への任命を求めるべきではない。その熱望は正しい望みではない。それは



「キリストの言葉を
よく味わえ……。

それは
キリストの言葉は、
あなたたちのしなくては
ならないことを
みな教えるからである」

—Ⅱニーファイ32:3—

ひとり合点の野心である。私たちはたとえ何であっても、自分に与えられる神権の召しを全力を尽くして果たそうとするだけの望みを物つべきである。福音に従い、召された仕事を何であろうと勤勉に果たすことで、その望みを立証するべきである。教会の特定の役職を保持することが、人を救うのでは決していない。人の救いは、自分の召しに伴う義務をいかによく果たしたかによるのである。予言者ジョセフ・スミスは言った。

「福音を説く神のしもべらの資格を顧みれば、われわれは祭司にふさわしい者さえほとんどいないことを発見する。もし祭司がその義務、その召し、その職務を理解して、聖霊により説く

ならば、その喜びは大管長会の一員になったがごとく大いなるものであり、彼の奉仕は教師や執事同様、教会全体にとって必要なのである。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」〔英文〕P. 112)

効果ある望みは、単なる願望でもない。それは生きた望みである。人を行動に駆りたてる確信である。神権者が駆りたてられるその行動のひとつは、永遠の生命の言葉を調べ、深く考えることである。

私たちはそれが何であるかを知らずに「神の口から出る一つ一つの言で生きる」ことはできないので、神の言葉を学ぶことが絶対に必要である。主はそうすることを私たちに命じられた。

イエスが神を父と言われたことでユダヤ人の怒りが高まったとき、イエスはそれに対してこのように言われた。「聖典を調べなさい。あなたがたは、聖典の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖典は、わたしについてあかしをするものだからである。」(ヨハネ5:39)

主は誠命の書の序文で言われた。「人々よ、これらの誠命をしらべよ。そはこれらは真実確なる誠命にして、その中に言われたる予言も約束もすべて成就さるべければなり。」(教義と聖約1:37)

私たちは、「聖書と……モルモン経とに誌されたるわが福音の原則を教うべし」との神よりの指示を受けている。(教義を聖約42:12) その原則が何であるかを知らなければ、教えることはできない。

予言者ジョセフとオリバー・カウド

りとジョン・ホイットマーに主は言われた。「見よ、われ汝らに告ぐ。汝らは聖典を学び……ために専ら汝らの時を費すべし。」(教義と聖約26:1)

主はすでに与えた指示についてカートランドの聖徒たちに言われた。「汝らこれらの言を聞け。見よ、われは世の救い主なるイエス・キリストなり。これらのことを汝らの胸にしかと銘ぜよ。汝らのところに永遠の厳肅なることを銘記すべし。」(教義と聖約43:34)

私は、聖典を読んでいて、モルモン経によく出てくる「深く考える」、「よくよく考える」、「思いにふける」という言葉に心を動かされた。辞書では、これらの言葉 (Ponder, meditate, reflect, 以上は同意語である) は「心にはかる、物事について深く考える、思案する」という意味である。モロナイはこの言葉を自分の記録の最後に用いている。

「ごらん、私はあなたたちにすすめたい。あなたたちがこの記録を読むことを神が許したもうならば……主が世の人々にどれほど憐みを垂れたもうたかを思い起して心の中に深く考えてほしい。」(モロナイ10:3)

イエスはニーファイ人に言われた。

「汝らは理解力弱く……教えが、ことごとく汝らに了解されざること明らかかなり。……されば、汝らは各々その住居に帰りて後、われがこれまで汝らに語りしことをよくよく考えて、汝らの理解できるために……わが名によりて御父に祈るべし。」(Ⅲニーファイ17:2, 3)

「深く考える」ことは、思うに、祈りのひとつの形である。少なくとも、

多くの場合に主のみたまに近づく方法となる。ニーファイはそのような場合のことを語っている。

「私は父の見たことを知りたいと思ひ、主は私にもまたそれを知らせたもうことができると信じて思いに耽りながら腰をかけていたが、私は主の『みたま』にとらえられて、まだ見たこともないし一度も足を踏み入れたこともない非常に高い山へやってきた。」(Ⅰニーファイ11:1)

そのあとに、主のみたまにより与えられた大いなる示現の説明が続いている。それはニーファイが予言者である父の言葉を信じ、自分が熟考し祈った事柄についてもっと多くのことを知りたいと強く願ったためであった。

ジョセフ・F・スミス大管長は、「1918年10月3日、私は自分の部屋に座って聖句を考え……」と記述している。彼はこのとき、キリストの体が墓に横たわっている間に、「獄に捕われている霊どものところに下って行き、宣べ伝えることをされた」(Ⅰペテロ3:19)というペテロの記事のことに言及した。

「私はこれらのことについて考えていると、理解の眼が開かれ、主のみたまが私にとどまって、小さき者と大いなる者を含めた死者の群れを見た。……」このあとスミス大管長は、死者の霊たちの間における伝道事業についてすばらしい示現を見たことを説明している。(福音の教義第2巻P.224)

「永遠の生命の言」を望み、調べ、深く考えること、かくも重要なこの3つがすべてそろっても、祈りがなければ不十分である。

祈りは、救い主に至る門を開く仲立ちとなるものである。主は言っておられる。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまた、わたしと食を共にするであろう。」(黙示3:20)

太初から、私たちは祈るように教えられてきた。主はアダムとイヴに「主なる汝らの神を礼拝せよと命じられ、あとで天使がつかわされて「汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし」と告げた。(モーセ5:5, 8)

イエスはニーファイ人に教えられた。

「われ、まことにまことに汝らに告ぐ、汝らは誘惑に負けざるよう、たえず目を覚して祈らざるべからず。そはサタンが汝らを支配して麦のごとくにふるわんと欲すればなり。されば汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず。

汝らの妻子が祝福を受くるよう、たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ。」(Ⅲニーファイ18:18, 19, 21)

この神権時代に、教会が組織される以前から、主は予言者にこのように言われた。

「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ、また現にサタンの仕事に力を与うるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約10:5)

また祭司たちに、「各会員の家庭を訪れ、彼らが声を挙げてもしよかにても祈りをなし……ように勤めよと教



「祈りは、救い主に至る門を開く
仲立ちとなるものである」

えられた。(教義と聖約20:47, 51)

また、ミズーリ州ジャクソン郡建設に向かった教会員について、「……およそ、祈るべき時にわが前に祈りをなすことを守らざる者は、わが民を審く者の前に覚えらるべし」と言われた。

(教義と聖約68:33)

そしてまた、主はこう言われた。

「……汝らかの悪魔に征服せられて、今居る所より立ちのかされざる様常に祈るべし。」(教義と聖約93:49)

話のまとめに、ニーファイの訓戒を聞いていただきたい。私はこの言葉が私を感動させたように、皆様方の心を打つことを願うものである。ニーファイは言った。

「さてごらん、私の愛する兄弟たちよ。……

……私はキリストの言葉をよく味わえとあなたたちに勧めた。それはキリ

ストの言葉は、あなたたちのしなくてはならないことをみな教えるからである。従って私がこのようなことを話してからでも、もしあなたがまだ解らないならば、それはあなたが尋ね求めもせずまた天の門を叩かないからである。従ってあなたは光明のある所に導かれなくて、暗黒の中に迷って亡びるに違いない。

さて私の愛する兄弟たちよ。私はあなたがまだ心に考えこんでいるのを認め、このようなことをあなたたちに戒めなければならぬのをまことに悲しく思う。あなたがもし祈らねばならぬことを教える『みたま』の言葉に聞き従うならば、あなたは祈らなくてはならないことを覚るであろう。悪魔は祈れと人に教えず、かえって祈ってはならないと教える。しかしごらんよく言うておく。あなたたちは

力を落さずに、いつも祈らなくてはならない、そして自分たちの働きが自分の身も霊も救われるように天の御父がその働きを祝福したもうよう、キリストの御名によってまず天の御父に祈らないでは主の御前にどのような働きもしてはならないと。」(Ⅱニーファイ32:1, 3, 4, 8, 9)

聖なる神権を保持する各神権者が、永遠の生命の言葉を調べ、熟考し、それについて祈ることにより、その人を動機づける力強い望みを得て、神権の召しを全力を尽くして遂行する人となるように主が助けたまわんことを。また、それにより私たちが「神権につける誓約」の約束された祝福を受けるにふさわしくならんことを。イエス・キリストの御名により、へりくだり祈る。アーメン。

メリークリスマス

プライマリーからのプレゼント!!



東京の子どもたち



札幌の子どもたち



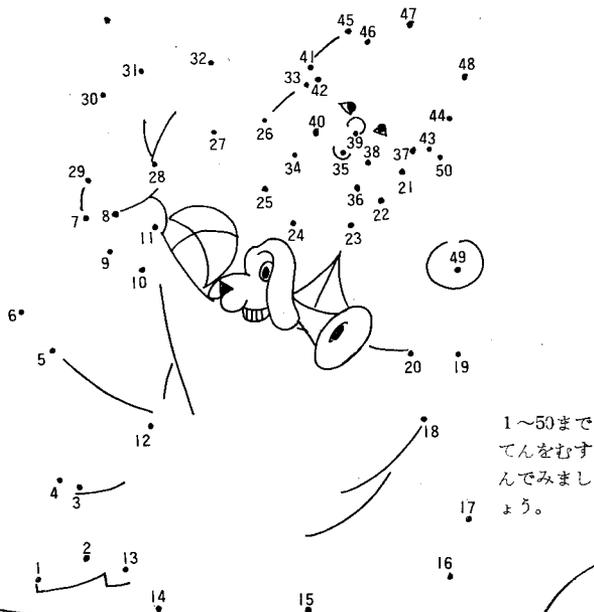
名古屋の子どもたち



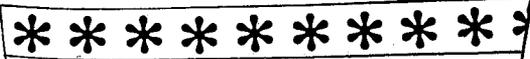
大阪の子どもたち



福岡の子どもたち



1~50まで
てんをむす
んでみまし
ょう。



プライマリー

菊地 恵 (11歳)
旭川支部

私は、酒井さんに、しょう介
れました。そのときは、どんなこ
とをするのかなあと思っていました。
なんだかはずかしいような気

持でした。その初めて行く日は、雨がふっていたので、行こ
うか行くまいかと、まよいましたが、やっと決心がつけました。
教会には、いろいろな人がいて、はずかしかったのですが、
なんだかしぜんになれてきました。礼はいどうに入った
ときは、とてもいい気分になってきました。ピアノの音がと
てもきれいで、ワクワクしてきました。あとからいろいろな
所も観察しましたが、一カ所だけおもしろい所が見つかりま
した。それはおふろみたいな所です。そこには階段があっ
て、底は、とてもふかいようです。そのおふろは、バプテスマ
を受ける所だと、酒井さんにききました。教室は、屋根が
三角屋根でした。とてもおもしろい教室やおふろでした。

ぼくのあかし

伊礼門 茂
守口支部



ぼくが、教会に初めて出席したのは、小さいときで
した。

そのときから今までにいろいろなことをけいけんし
ましたので、そのことを少しみなさんにお話します。

ぼくが大阪第3ワード部にいたころ、初めて、子供
日曜学校で、2分半のお話しのせきにんをもらったと
きに、ぜんぜんなにを話せばいいのかわからなかった
ので、神様にお祈りして、「今ぼくは、2分半で、何を話す
のかわからないで、こまっています。どうか、ちえをかして
下さい」と、お願いしました。

そのあと、ノートに話すことを書いていると、あとからあ
とから話すことがうかんできました。神様がいらっしゃっ
て、ぼくたちのお願いをかなえて下さることがこれでわかり
ました。

また、友だちの家に遊びに行ったとき、紅茶ができました。
それで、「ぼくはきらいだからいいです」と言おうとしても、
「教会に行っている人は、お茶や、紅茶や、コーヒーなど
を飲まないように教えられているので、いいです」と言った
ときがあります。

また、ほかの友だちにも話せるようになりました。

6月3日、日曜日に友だちが緑地に行こうと、さそいに来
ました。

「教会があるから、行けない」と、ことわったら、
「教会が終わってから行ったら？」と友だちに言われたの

で、

「うん」と、ぼくは言いました。

けれども、なんとなく「やっぱりやめる」と、ことわりま
した。

あとから考えてみると、日曜日は、きよくすごさなくては
いけないので、聖霊が、みちびいてくれて、ことわらせたん
だなと思いました。

それは、プライマリーで、聖霊は、良い方にみちびいてく
れるということを知ったからです。そのことが、ほんとうの
ことだとわかりました。

ほんとうに神様がいらっしゃって、ぼくたちのおねがいを
いつも聞いて下さること、また、プライマリーや日曜学校で
習っているイエス様の福音をぼくたちがよく理解し、そして
その教えをよく実行することができるように、いつも聖霊が
ぼくたちを良い方にみちびいて下さることを信じています。

来年は神権を受けることができるように、開拓者コースで
信仰か条についても勉強しています。



プライマリー

小林 聖子

東京第3ワード部

プライマリーのことを証するとき、パブテスマを受けてから1年7カ月の出来事がスライドでも見るように浮かんできます。そして、もう少し神様から受けている愛に応えるよう努力できたのではないかと、反省させられます。

プライマリーの召しがあったとき、正直なところ不安でした。小さい頃から大人だけの環境で育った私は、極度の子供嫌いだったからです。今でも私が子供相手の責任を持っているということを信じない友人がいるくらいです。

今年の3月まで「かりゅうど」(小学3, 4年のクラス)の教師をしている間に受けた祝福の何と大きいことでしょう。教師としていつも八方破れの私でしたが、本当に素晴らしい生徒に恵まれましたことを感謝しています。教えることよりも、教わることの方が、はるかに多かったように思いま

す。開会行事でのお祈りを頼まれたある女の子は、からだの具合が悪くて学校はお休みしたのに、青い顔をしながらきちんと責任を果たしてくれました。初めての活動でクッキー作りをしたとき、ふたりの息子は粉だらけになりながら、私の顔を焼いてプレゼントしてくれました。ポンコツ車にみんなでワイワイ乗りこんでクイズを考えたり、天才バカボンの歌を合唱して遊んだこともありました。初めのうちお祈りをいやがっていた子が、次第に活発になり、自分からお祈りをしたがるようになりました。

もちろん、楽しいことばかりではありませんでしたけれど、このような子供たちの成長を見るにつけても、決して教会を離れることはできないと思いました。私にできるたったひとつのことは、活発に教会に参加するということだけなのです。

教師をしているとき、私のまわりには素晴らしい模範がたくさんありました。いろいろな問題をかかえながらもいつも明るく励ましてくれた会長さん、予定日ま近い大きなお腹をかかえてレッスンをしていたママさん先生たち、暖かい愛で包んでくださ

ったステーキ部の役員の方々、監督さん等。学生で一人身の私がおっと頑張れないはずがないと、自分で自分に言い聞かせたものでした。

生徒が、かわいい小学生からひねた大人に変わって、早いものでもう7カ月が過ぎました。次から次と問題が起き、(今考えると、他愛のないものですけれど)最初の頃はグロッキー気味。監督さんや神権アドバイザーに泣きついたり、前会長に手紙で訴えたこともありました。このような大役を与えられた神様を恨んだことも1度や2度ではありませんでした。

学校にいても、旅行に行っても、どこにいても子供たちのことが気がかりであったのと同じ気持ちを、愛情を、先生方に対して少しでも持っていたら……。子供たちも先生方も、私にとって生徒に変わりないということに気付くまでにしばらくの時間がかかりました。そしてそのことに気付いたとき、私を悩ませていた多くの問題はなくなっていました。

現在、愛する子供たち、すばらしい先生方、会長会に囲まれ、毎週のびのびやらせていただいております。成長過程にあるプライマリーで、今こそしっかりと土台を築いておく必要があり、またその責任も痛切に感じています。来週からまた頑張らなくっちゃ。

ホームプライマリー

釜石 節子

姫路支部

伝道を兼ねて近所の子供さんと一緒に始めたホームプライマリーですが、素晴らしい霊の子供たちが選ばれていることを知って、神様の御手が働いていることを感謝せずにはおられません。祈りを知らなかった子供が祈れるようになったとき、神様の教えに触れて変わっていく子供の姿を見るとき喜びは何物にも変えがたいものです。

兄弟の入院で私も勤めをしなければなりませんでしたが、ホームプライマリーの準備のため、土曜日お休みの仕事が与えられたことも、神様の召しを心から果たそうとするなら必ず道が備えられるという大きな証になりました。

土曜日は朝からお部屋を掃除して、レッスンの準備をします。そして服を着替えて子供たちを待ちますが、いつも時間の15分前には来てくれますので、本当に感謝しています。暑いときも、雨の日も通ってきてくれる子供たちを見るときに、もっともっと頑張らないといけないと思います。

先日プライマリーの子供のお母さんにお目にかかる時、食事の前に感謝の祈りをさせていただくので、何でも食べるようになったこと、風邪で寝ていたときに子供がお祈りをしてくれました、と涙を浮かべて話し

て下さいました。本当にうれしく思いました。子供に教えていて、子供から多くのことを教えられることも喜びです。まだまだ私のプライマリーは未熟ですが、愛する子供たちのために、頑張りたいと願っています。

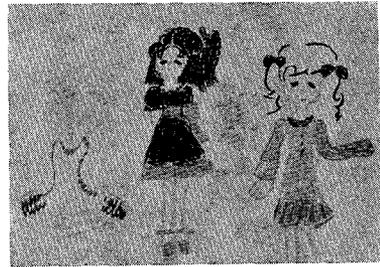




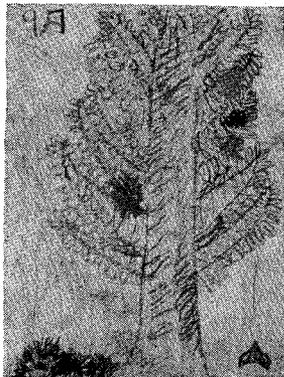
大村仁志(10才)
名古屋伝道部



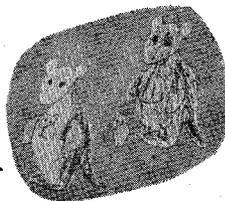
松下まなみ(7才)
東京ステーク部



辻村浩子(12才)
名古屋伝道部



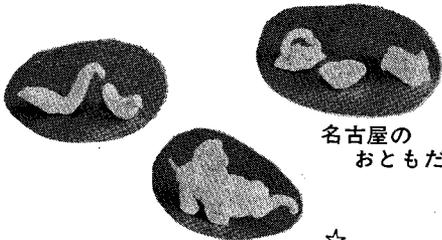
福田 満(8才)
東京ステーク部



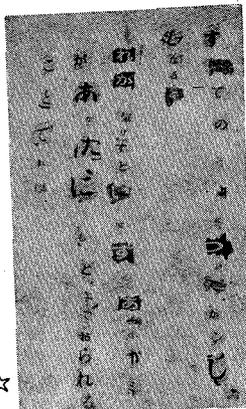
福岡のおともだち



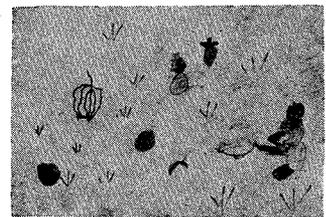
ひかりクラスのおともだち
東伝道部



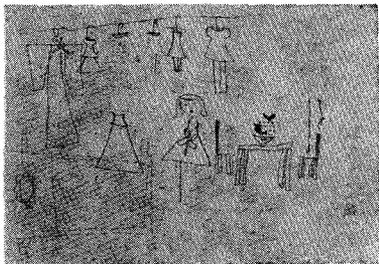
名古屋の
おともだち



西嶋ホームのおともだち
東伝道部



小浦和子(8才)
名古屋伝道部



小浦はるえ(6才)
名古屋伝道部

わたしたちの
さくひん

